

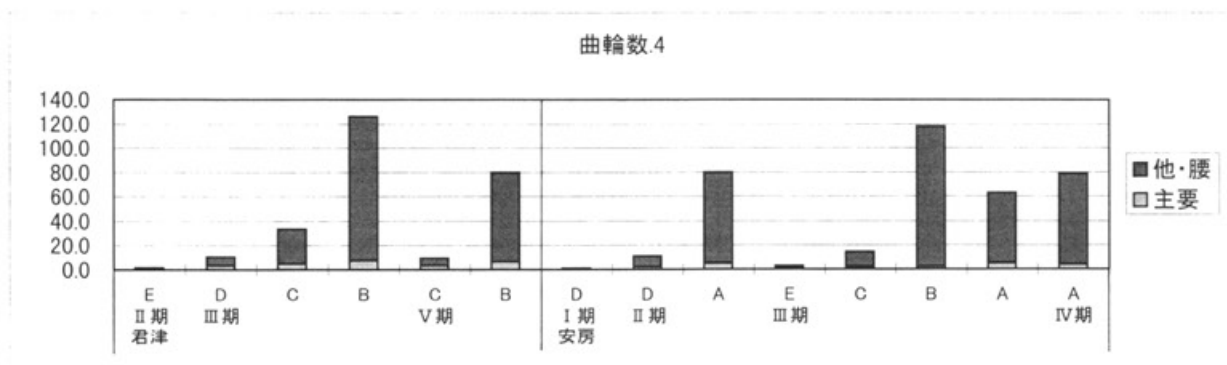
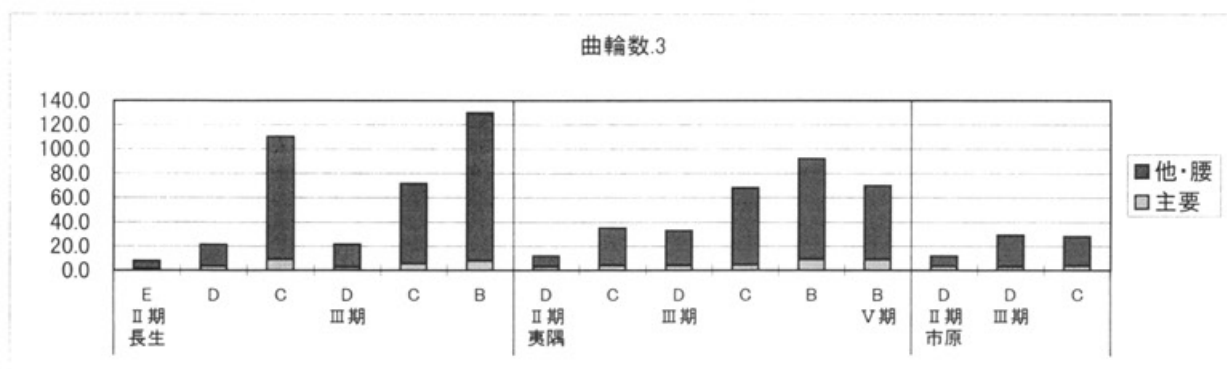
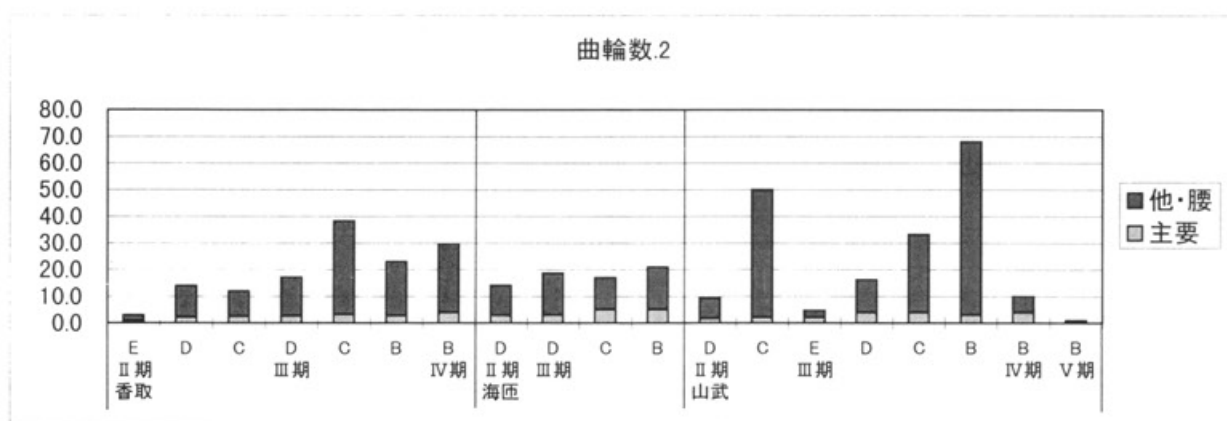
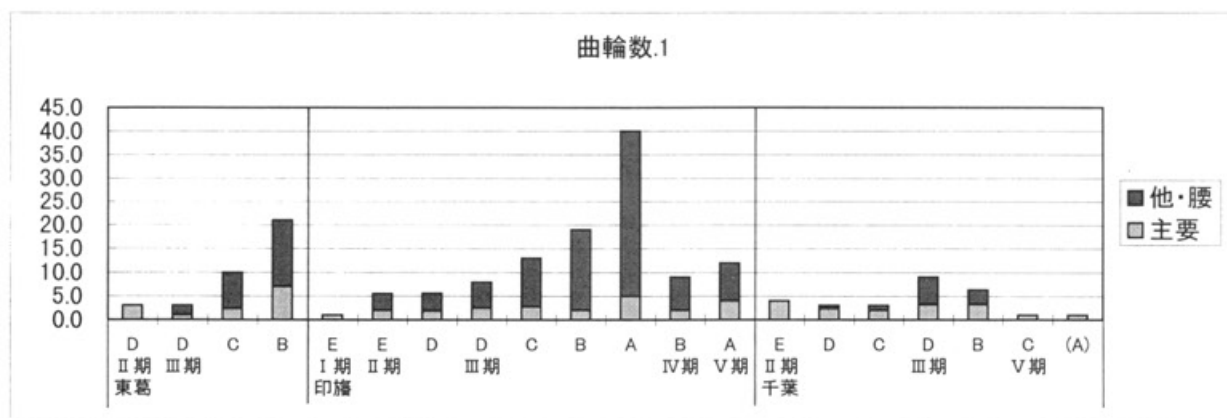
第5表 千葉県内中近世城館跡構造等 地域、時期、城・城主クラス別データ

時期：Ⅰ期：12c～15c前半、Ⅱ期：15c後半～16c初頭、Ⅲ期：16c前葉～末、Ⅳ期：16c末～17c初頭、Ⅴ期：17c前葉～19c

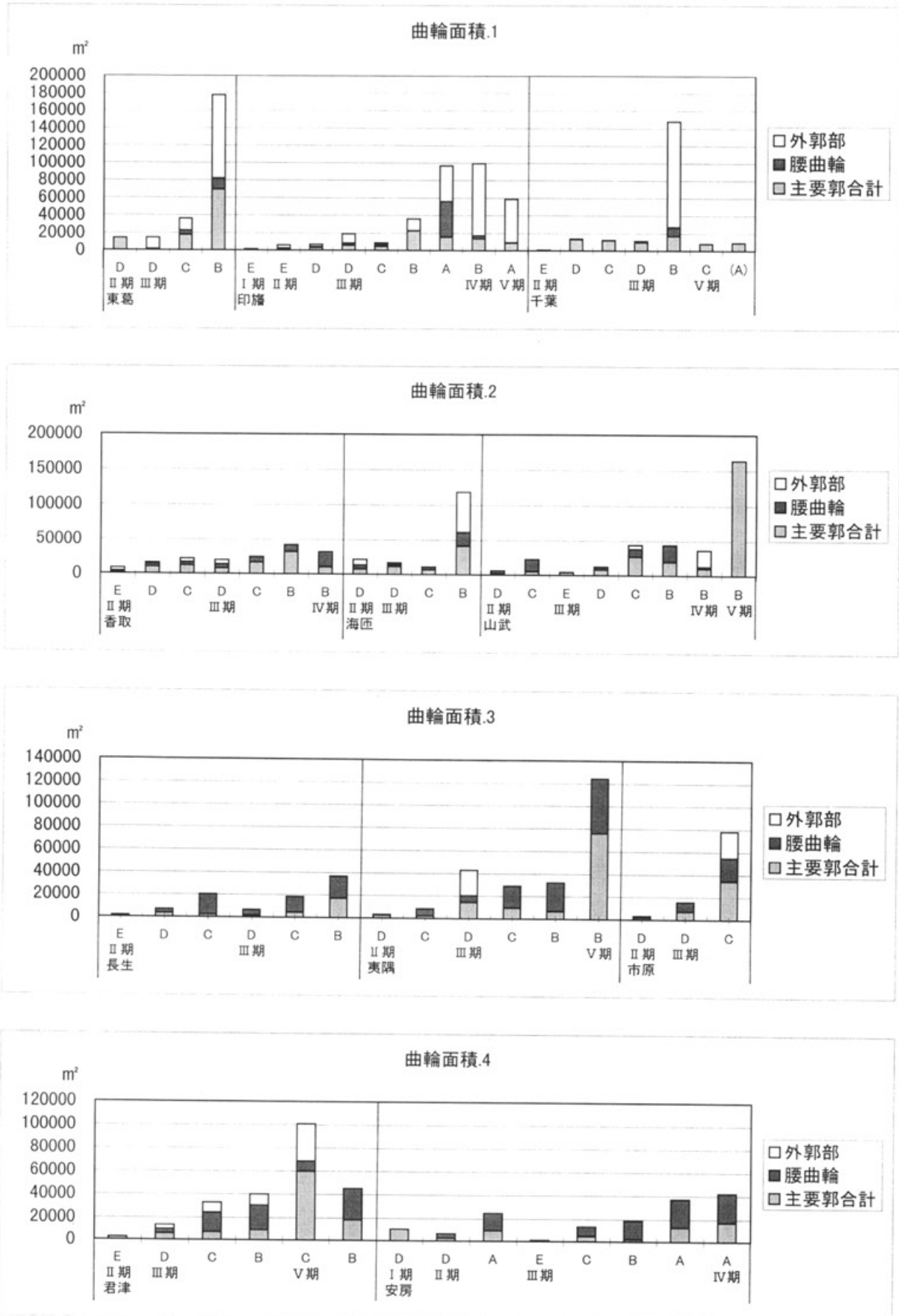
城・城主クラス：A：一国以上の領域を持つ戦国大名（千葉宗家・里見氏）の本城/B：一部～数郡の領域を持つ、国人領主層・戦国大名被官（原・大須賀・国分・酒井・正木・武田等）の本城＝戦国大名の支城/C：現市町村規模の領域を持つ、国人領主重臣層の本城/D：数村規模の領域を持つ在り領主層の城/E：一村程度の領域を持つ小領主層・上層農民層の城

地域	時期	城・城主クラス	立地						曲輪数			曲輪面積 (㎡)						空堀				土塁		構造				地名								
			地形区分			地形内位置			比高	主要	他・腰	合計	主郭	Ⅱ郭	Ⅲ郭	他の主要郭	主要郭面積合計	腰曲輪	外郭部	合計	横堀セツト数	堀切数	竪堀数	堀長さ	土塁長さ	土塁状尾根	折れ歪み数	櫓形虎口（明確）	櫓形虎口（不明確）	馬出し	堀之内	要害	城山	根小（古）屋	宿	
			丘陵	台地	低地	先端	内部・奥	先端から奥																												
東葛	Ⅱ期	D	0.0	1.0	0.0	0.0	1.0	0.0	1	3.0	0	3	3100	3470	7420	0	13990	0	0	13990	3.0	0.0	0.0	820	270	0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0
		D	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	13	1.0	2	3	840	0	0	0	840	290	13090	14220	2.0	0.0	0.0	380	400	0	4.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0
		C	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	14	2.3	8	10	1783	3140	3450	37700	17542	4793	13615	26873	1.6	0.5	0.6	307	456	0	2.5	0.2	0.2	0.0	0.0	0.2	0.3	0.0	0.0	
東葛	Ⅲ期	B	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	17	7.0	14	21	4690	8170	21900	49350	69075	12450	95800	177325	2.0	0.0	2.5	2600	795	0	9.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0
		E	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	29	1.0	0	1	1230	0	0	0	1230	0	0	1230	1.0	0.0	0.0	230	170	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		E	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	19	2.0	4	6	1303	530	0	540	1703	380	3720	2918	0.5	0.0	1.0	133	81	33	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0
印旛	Ⅱ期	D	0.0	1.0	0.0	0.9	0.1	0.0	18	1.9	4	6	1989	1603	0	0	2904	1085	2640	3901	1.1	0.6	0.1	194	226	0	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.3	0.2
		D	0.0	1.0	0.0	1.0	0.1	0.0	21	2.5	5	8	2424	2141	2867	2592	5560	2504	10783	10798	1.0	0.5	0.7	241	286	0	2.7	0.2	0.3	0.0	0.1	0.1	0.1	0.3	0.2	
	Ⅲ期	C	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	16	2.8	10	13	2060	2047	413	905	4358	2343	1925	7663	1.5	1.3	0.8	318	308	0	2.5	0.3	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		B	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	24	2.0	17	19	19200	3300	0	0	22500	0	13500	36000	1.0	2.0	0.0	400	130	0	3.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	
		A	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	1.0	24	5.0	35	40	3480	6380	2170	3220	15250	40310	41000	96560	1.0	4.0	1.0	2480	1100	160	9.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	
	Ⅳ期	B	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	1.0	22	2.0	7	9	5845	9420	6020	0	13570	3390	82265	99225	1.5	1.5	0.5	795	385	0	3.5	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0
		A	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	1.0	28	4.0	8	12	1490	2270	3340	1560	8660	500	49280	58440	5.0	0.0	0.0	2310	3640	0	13.0	4.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	
千葉	Ⅱ期	E	0.0	1.0	0.0	0.0	1.0	0.0	22	4.0	0	4	510	100	140	50	800	0	0	800	1.0	0.0	0.0	180	130	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
		D	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	16	2.3	1	3	5713	4025	2600	10630	12807	855	0	13377	0.7	1.3	1.7	207	403	0	1.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	
		C	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	18	2.0	1	3	11580	270	?	?	11850	460	0	12310	0.0	0.0	0.0	30	150	0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	Ⅲ期	D	0.0	1.0	0.0	0.8	0.3	0.0	20	3.3	6	9	3226	5705	845	425	9566	1830	0	10939	1.5	1.0	0.8	383	415	0	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.5	
		B	0.0	1.0	0.0	0.3	0.3	0.3	18	3.3	3	6	5930	2875	3405	10330	17003	9790	121217	144747	1.7	1.7	0.3	850	490	0	4.3	1.0	0.3	1.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	
Ⅴ期	C	0.0	1.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0	1.0	0	1	8000	0	0	0	8000	0	0	8000	1.0	0.0	0.0	470	310	0	5.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	
	(A)	0.0	1.0	0.0	0.0	1.0	0.0	13	1.0	0	1	9020	0	0	0	9020	0	0	9020	1.0	0.0	0.0	450	420	0	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
香取	Ⅱ期	E	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	23	1.0	2	3	2013	0	0	0	2013	1477	4440	4970	0.3	0.0	0.3	67	97	7	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0
		D	0.2	0.9	0.0	1.0	0.1	0.0	25	2.1	12	14	4673	4709	2580	6215	9728	4476	1810	14747	0.7	0.6	0.8	228	202	0	0.7	0.1	0.3	0.0	0.1	0.2	0.1	0.0	0.1	
		C	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	24	2.5	10	12	1930	6855	0	0	12060	4570	5400	19330	0.0	1.5	0.5	140	185	10	1.5	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	Ⅲ期	D	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	26	2.6	15	17	2724	4694	2634	2046	7774	5565	6636	15892	0.8	1.3	1.6	275	250	11	2.1	0.1	0.2	0.2	0.0	0.2	0.2	0.6	0.2	
		C	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	34	3.3	35	38	4470	8848	2863	1350	16518	7963	0	24480	1.3	3.0	3.8	309	370	23	3.3	0.0	0.5	0.3	0.0	0.0	0.5	0.5	0.5	
		B	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	31	2.8	20	23	6236	17514	7975	4685	32004	9998	0	42002	1.4	0.2	0.4	638	434	0	2.6	0.2	0.6	0.2	0.0	0.4	0.2	0.6	0.4	
Ⅳ期	B	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	24	4.0	26	30	3820	1430	2040	2910	10200	21820	0	32020	0.0	4.0	7.0	420	280	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
海匝	Ⅱ期	D	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	31	2.9	11	14	3717	2512	2090	4295	7255	5888	8550	14211	0.6	2.8	0.6	186	239	0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.1	0.0	0.0	
		D	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	25	3.0	16	19	2050	2170	10760	590	11590	3057	2210	15383	0.7	2.3	3.3	253	153	0	0.7	0.7	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.3	0.0	
	Ⅲ期	C	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	22	5.0	12	17	2200	620	2550	1310	6680	4610	0	11290	1.0	3.0	0.0	110	280	0	1.0	1.0	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	
		B	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	1.0	27	5.0	16	21	5620	8800	3280	23380	41080	20000	57660	118740	3.0	2.0	2.0	710	330	0	3.0	0.0	0.0	0.0	1.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0

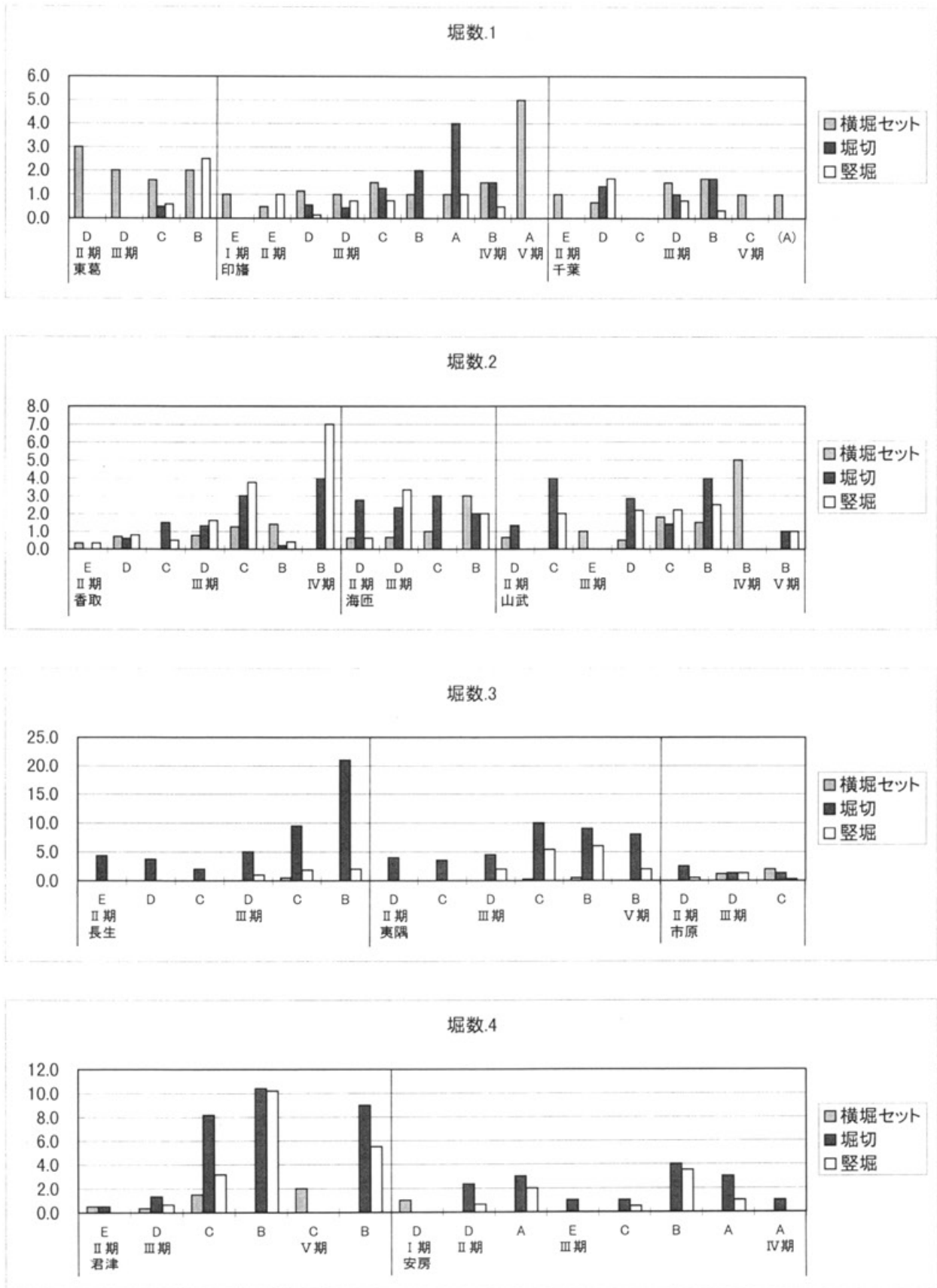
第3節 地域、時期、城・城主クラス別特色



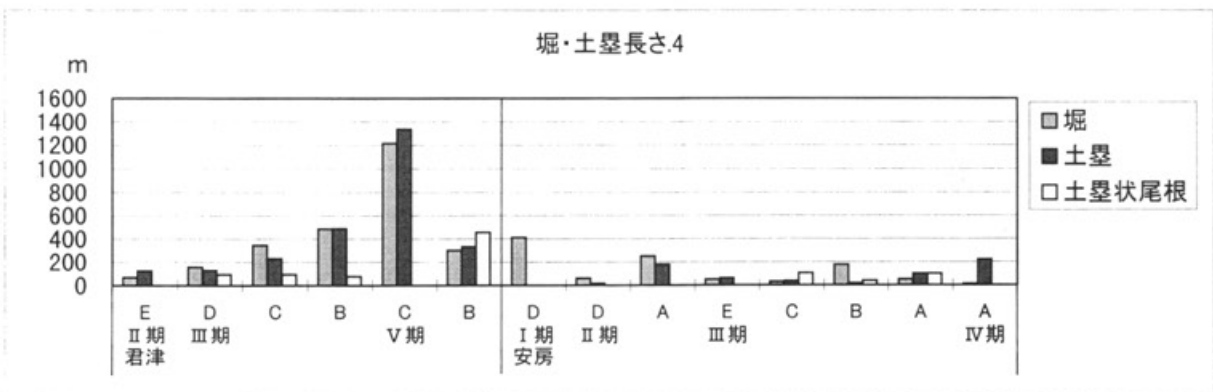
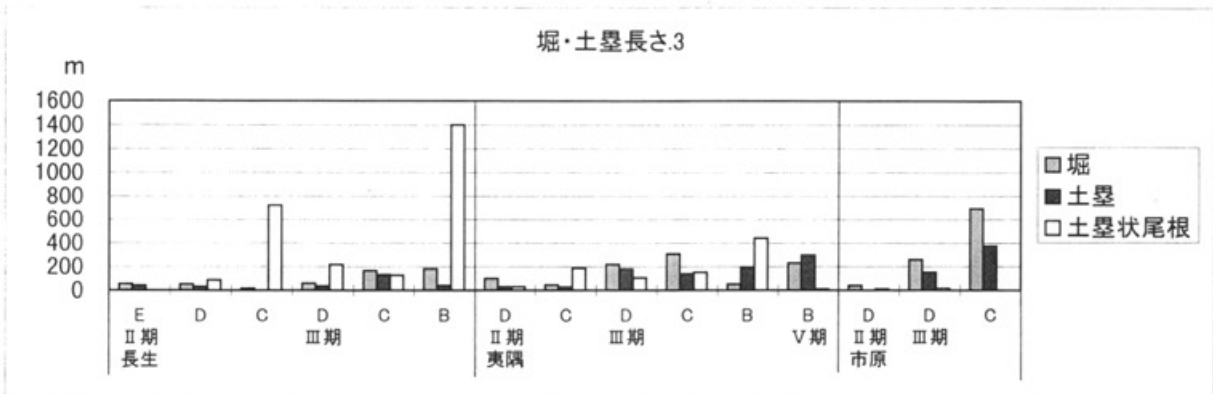
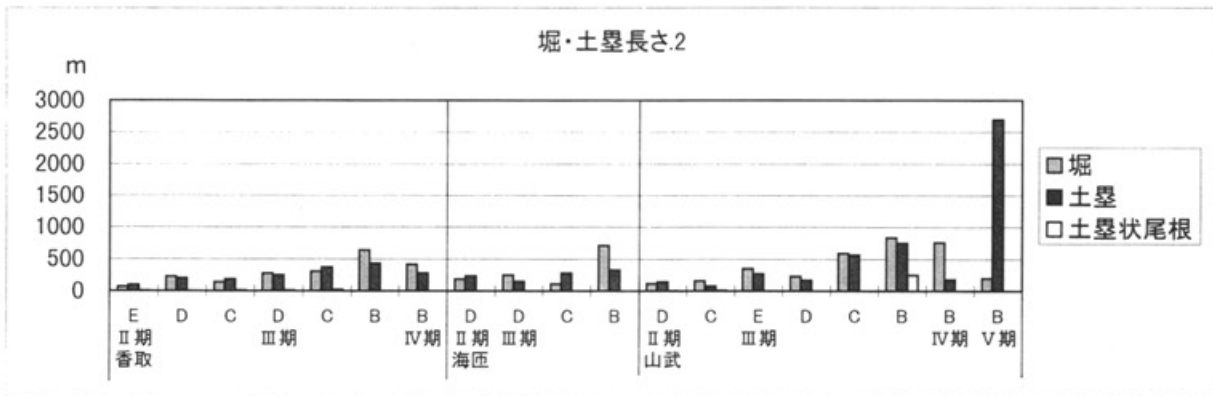
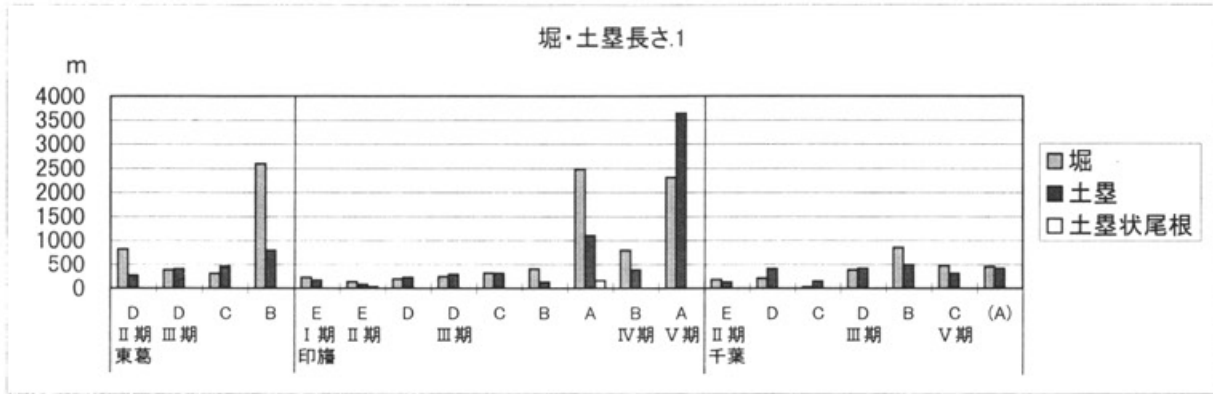
第168図 地域、時期、城・城主クラス別曲輪数



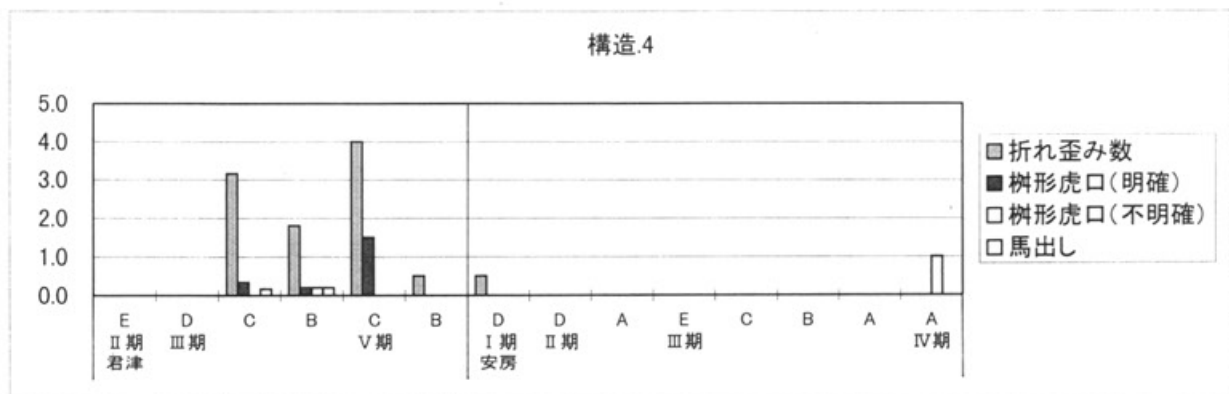
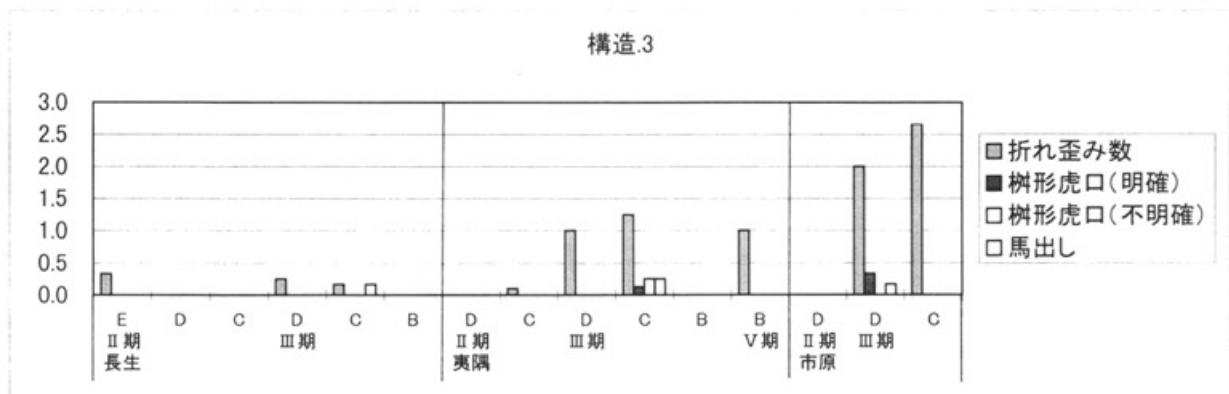
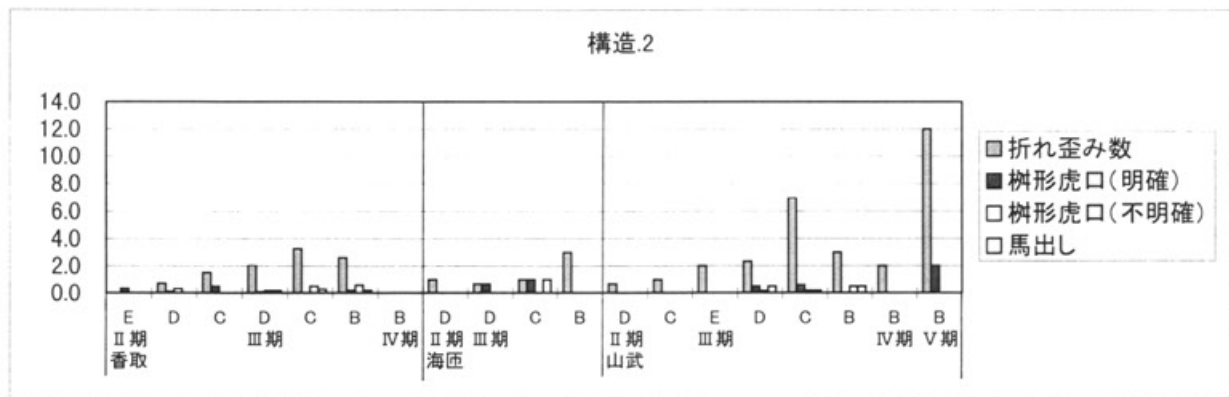
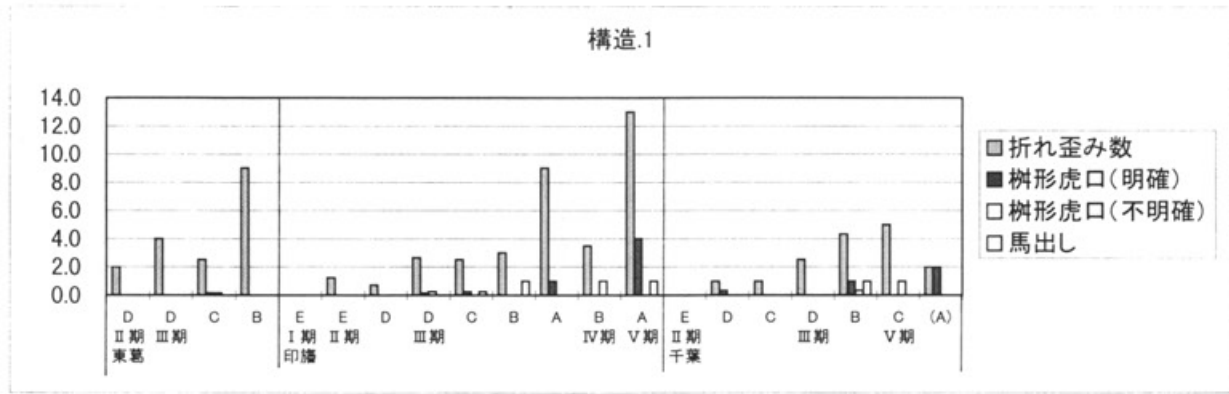
第169図 地域、時期、城・城主クラス別曲輪面積



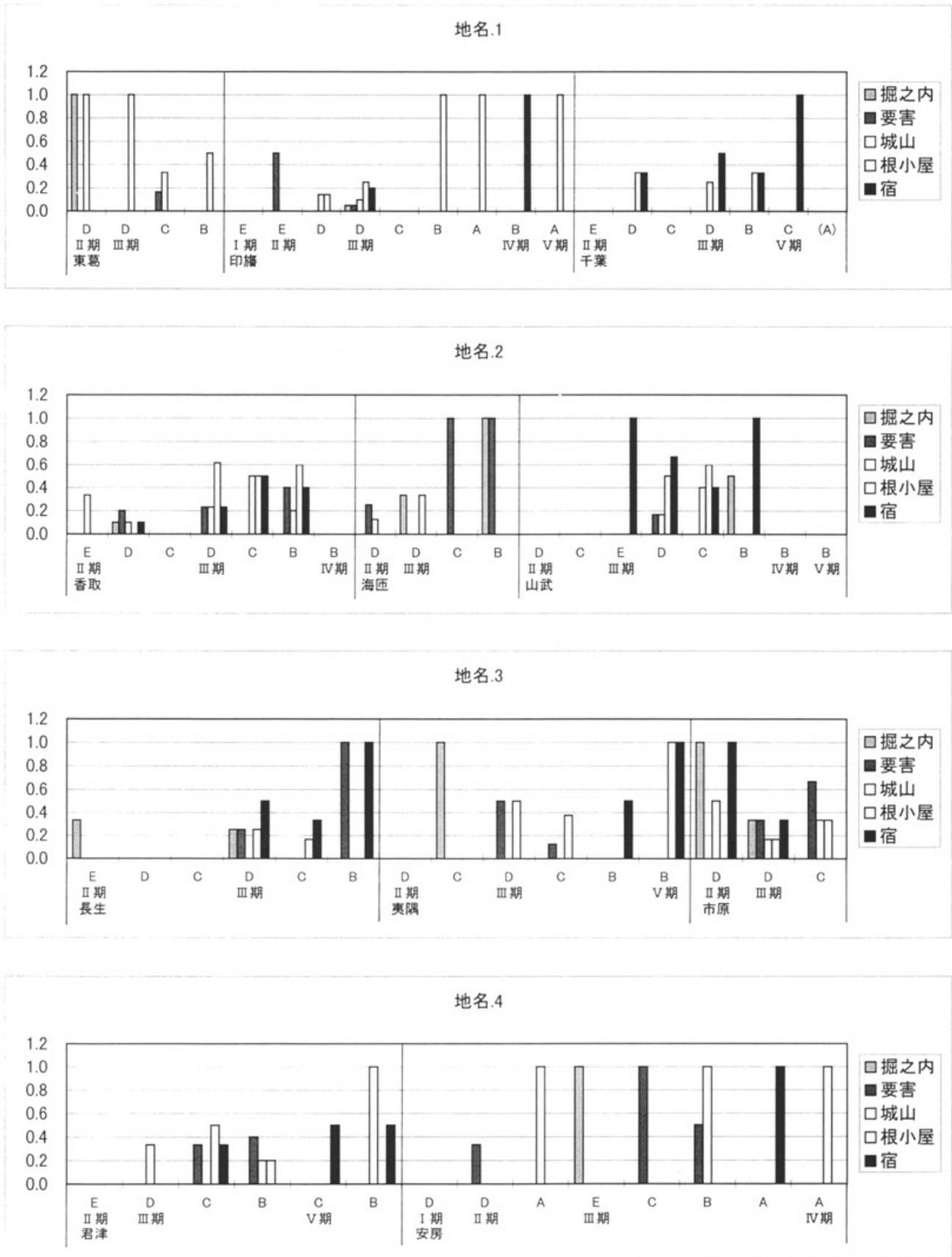
第170図 地域、時期、城・城主クラス別堀数



第171図 地域、時期、城・城主クラス別堀・土塁長さ



第172図 地域、時期、城・城主クラス別特殊構造



第173図 地域、時期、城・城主クラス別地名

(6) 地名

地名については、数値は有無（0または1）の平均なので、1は該当する時期・城主クラスの城館跡全てに存在するということである。

「掘之内」は、II期Dクラスに1.0と見えるのみである。

「要害」は、III期Cクラスに0.2と僅かに見えるのみである。

「城山」は、II期Dクラスに1.0とIII期Cクラスに0.3に見える。

「根小屋」は、II期にはなく、III期Dクラスに1.0、Bクラスに0.5見える。

「宿」は、データの城館跡内には存在しない。

データは少ないが、全体的には「掘之内」はII期に、「要害」・「城山」はIII期に、「根小屋」はIII期に多い傾向である。ただ、注意しなければならないのは、城館跡周辺の地名も含んでいること、I～V期の時期は機能した最終段階を示すため、機能した時期が長ければ古い時期の地名が残存していることもあることである。

2. 印旛地域（第20図～第43図）

(1) 曲輪数

主要郭数は、I期(1)→II期(2前後)→III期D・C・Bクラス(2～3)→III期Aクラス(5)と増加し、近世は、IV期(2)→V期(4)と徐々に増加する。

腰曲輪数は、東葛地域や千葉地域と比較すれば腰曲輪数は多い方で、I期Eクラス(小林城跡古段階)は存在せず、II期Eクラス(東作城跡他)・Dクラス(北ノ作遺跡古段階他 4)→III期Dクラス(小林城跡新段階・笠神城跡・駒井野城跡・鹿渡城跡他 5)→Cクラス(北ノ作遺跡新段階・古屋城跡・和良比堀込城跡・長勝寺館跡他 10)・Bクラス(向根古屋城跡 17)→Aクラス(本佐倉城跡 35)と増加し、近世は、IV期Bクラス(臼井城跡・岩富城跡)は7、V期Bクラス(佐倉城跡)は8と減少する。本佐倉城は下総国から上総国北部にかけて広がる千葉氏一族の本城であったのでIII期Aクラスとした。なお、III期の和良比堀込城跡は、16世紀中頃に里見氏が下総を攻撃した際の一時的な基地となった事実はあるが、本来はCクラスであろう。また、IV期の臼井城・岩富城のIII期段階は、前者は千葉氏一族内において本宗家をも凌駕する勢力を有し印旛・千葉地域を領域とした原氏の本城でBクラス、後者は原氏一族の有力支城でCクラスであったので、16世紀後半(III期後半)にはほぼ現状の曲輪配置や惣構構造(データには入れていない)ができていたと考えられる。

(2) 曲輪面積

I期(1,200㎡余り)→II期Eクラス(約3,000㎡)→Dクラス(4,000㎡弱)→III期Dクラス(約10,800㎡)と増加するが、III期Cクラスは7,700㎡弱とやや減少し、III期Bクラス(36,000㎡)→Aクラス(約96,600㎡)・IV期Bクラス(約99,200㎡)と大幅に増加し、V期(佐倉城跡)は60,000㎡と若干減少する。III期Aクラスの本佐倉城跡・IV期Bクラスの臼井城跡・岩富城跡は、データには城下町を含む惣構は入れていないが、外郭部は82,000㎡強と城郭本体だけでも巨大である。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、I期～III期がほぼ1前後であるが、IV期Bクラスで1.5と微増し、V期Bクラス(佐倉城跡)では5と突出し、近世城郭の特徴といえる。堀切数は、I期とII期のEクラスには見られず、III期は

Dクラス(0.3)→Cクラス(1.5)と増加するが、Bクラスは1.0とやや減少し、Aクラスは4と増加し、IV期Bクラスは1.5と減少し、V期には存在しない。堅堀は、各期を通じて1以下と僅かに見られ、V期Aクラスには存在しない。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、I期Eクラスは230mであるが、II期以降は、II期Eクラス(約130m)→Dクラス(200m弱)→III期Dクラス(約240m)→Cクラス(約320m)→Bクラス(400m)と徐々に増加し、Aクラスは約2,500mと突出する。近世は、IV期Bクラス(約800m)→V期Bクラス(2,300m余)の順に増加し、特にIV期・V期の長さは突出する。

土塁の長さは、I期Eクラスは170mであるが、II期Eクラス(約80m)→Dクラス(約230m)→III期Dクラス(290m弱)→Cクラス(約320m)と増加し、III期Bクラスは130mと減少するが、Aクラスは約2,500mと突出し、近世は、IV期Bクラス(約620m)→V期Bクラス(3,640m)の順に増加する。

堀・土塁共に、I・II期は短い、III期には若干長くなり、III期Aクラス以降は長大となる傾向である。IV期Bクラスの臼井城跡・岩富城跡は、本来III期には本佐倉城の有力支城であり、数値的にもIII期Aクラスの次に位置する。

(5) 特殊構造

折り歪みはI期にはなく、II期はEクラス・Dクラスで1.0前後であるが、III期はDクラス・Cクラス・Bクラスが3.0前後と増加し、Aクラスは9.0と突出する。近世は、IV期Bクラス(5.3)→V期Bクラス(13.0)と大幅に増加する。

明確な桁形虎口は、I期・II期にはなく、III期はDクラス・Cクラスに0.2~0.3と少なく、Bクラスは3.0と増加する。III期Aクラスは1.0、IV期Bクラスは0.3と減少するが、V期Bクラスは4.0と増加する。

不明確な桁形虎口もI期・II期にはなく、III期はDクラスに0.3、C・B・Aクラスにはなく、IV期Bクラスに1.0と僅かに増え、V期Bクラスはない。

馬出しについては、III期Cクラスは0.3であるが、Bクラスは1.0と増加し、Aクラス・IV期Bクラスにはなく、V期Bクラスは復活して1.0である。

以上の発展した構造については、I・II期には見られず、基本的にはIII期→IV期→V期と数も増加する傾向と言えるが、発展した虎口については、III・IV期には少なくV期には明確になる。III・IV期は、発掘調査で多く検出されるのではないかと考えられる。

(6) 地名

「堀之内」はIII期Dクラスに0.1と僅かに見えるのみである。

「要害」はII期Eクラスに0.5、III期Dクラスに0.1と若干見えるのみである。

「城山」はI期Dクラスに0.1、III期Dクラスに0.1と若干見えるのみである。

「根小屋」はI期~II期Eクラスまで見えず、II期Dクラスに0.1と僅かに存在し、III期はDクラス(0.3)→Bクラス(1.0)と、IV期Bクラス(0.3)→V期Bクラス(1.0)と増加する。II期Dクラスの「根小屋」は印西市竜崖城跡の例であり、構造・規模的にはII期に最終段階と考えたが、水上交通関連の要所としてIII期まで機能した可能性もあろう。

「宿」は、I期・II期・V期には見えず、III期Dクラスに0.2、IV期Bクラスに0.7と見える。

全体的には、II期は「要害」、III期は「根小屋」、IV期は「宿」がやや多く見られる傾向である。

3. 千葉地域 (第44図～第51図)

(1) 曲輪数

主要郭数は、II期はEクラス(南屋敷遺跡)が4と多いが、D・Cクラスは2前後、III期は3.3、V期は1.0である。ただ、南屋敷遺跡は基本的には単郭であり、内部が仕切られているので郭数が多いだけである。つまり、基本的にはII期からIII期へと増加すると言ってよいであろう。なお、V期は御茶屋御殿跡と森川陣屋跡で、単郭方形である。

腰曲輪数は、県内でも最も少ない地域であり、II期はEクラス(南屋敷遺跡)・Dクラス(米本城跡・城の腰城跡他)・Cクラス(亥鼻城跡)が1～2、III期Dクラス(城山城跡・中野城跡・多部田城跡他)が6、Bクラス(北・南生実城跡・高品城跡)が3、V期Cクラス(森川陣屋跡)・(A)クラス(御茶屋御殿跡)は単郭方形である。ただ、亥鼻城跡は一部の発掘調査による遺物時期によりII期としたが、周囲の開発による破壊が著しく、本来はより規模の大きなIII期の城郭の可能性も考えられる。

(2) 曲輪面積

II期はEクラス(800m²)→Dクラス・Cクラス(13,000m²前後)、III期はDクラス(11,000m²弱)→Bクラス(145,000m²)と増加し、III期Bクラスの外郭部は120,000m²と広大である。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、II期が1.0以下であるが、III期に1.5～1.7と増え、V期は1.0と減少する。V期の減少は、御茶屋御殿と森川陣屋が単郭であるからである。堀切数は全体に少ないが、II期Dクラス(1.3)・III期Dクラス(1.0)・Bクラスで(1.7)で僅かに見られる。竪堀数は堀切数と同様、II期Dクラス(1.7)・III期Dクラス(0.8)・Bクラス(0.3)で僅かに見られる。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、II期はEクラス(180m)→Dクラス(200m余)と増加するが、Cクラスは30mと減少する。III期はDクラス(約380m)→Bクラス(850m)と増加し、V期はCクラス(470m)・(A)クラス(450m)とほぼ一町四方の方形館跡の堀である。

土塁の長さは、II期Eクラス(130m)→Dクラス(約400m)と増加するが、Cクラスは150mと減少し、III期はDクラス(410m余)→Bクラス(500m弱)と増加し、V期はCクラス(300m余)→(A)クラス(420m)と増加する。

土塁状尾根は、当地域には存在しない。

(5) 特殊構造

折り歪みはII期はEクラスにはなく、Dクラス・Cクラスが1.0と出現し、III期はDクラス(2.5)→Bクラス(4.3)→V期Cクラス(5.0)と増加し、(A)クラス(御茶屋御殿)は2.0と減少する。

明確な枡形虎口は、II期Dクラスに0.3、III期Bクラスに1.0と僅かに存在するが、V期(A)クラスは2.0と増加する。

不明確な枡形虎口はII期にはなく、III期Bクラスに0.3、V期Cクラスに1.0と若干存在する。

馬出しは、II期にはなく、III期Bクラスにのみ1.0と若干存在する。

全体的には、発展した構造はII期は少ないが、III期はDクラス→Bクラスへ増加する。V期(A)クラスの御茶屋御殿跡は方形単郭ながら2か所の出入り口に明確な枡形虎口を形成している。

(6) 地名

「堀之内」・「要害」は、データの中では当地域には見られない。

「城山」はII期・V期には見られず、III期のDクラスで0.3と若干見られるのみである。

「根小屋」は、II期DクラスとIII期Bクラスに0.3と若干見られる。II期Dクラスは八千代市米本城跡の例であるが、破壊が著しく、残存した構造からはII期で機能を閉じたものと考えられるが、伝承は16世紀後半に廃城となっており、III期の可能性もあろう。

「宿」は、II期Dクラスに0.3、III期はDクラスに0.5、Bクラスに0.3、V期はCクラスに1.0と若干見られる。

全体的には、III期には「城山」・「根小屋」・「宿」地名が少しずつ見られる傾向である。

4. 香取地域 (第52図～第75図)

(1) 曲輪数

(曲輪数)

主要郭数は、II期Eクラス(前林城跡・大根氏館跡他)が1であるが、II期Dクラス(大友城跡・鶴崎城跡他)・Cクラス(神崎城跡・名古屋城跡他)・III期Dクラス(久井崎城跡・武田砦跡・南敷城跡他)が2.5前後→III期Cクラス(馬洗城跡・籙木城跡・沼掛城跡他)・Bクラス(森山城跡・須賀山城跡・松子城跡・助崎城跡)が3前後→IV期Bクラス(大崎城跡)が4と増加する。ただ、大崎城跡は基本的にはIII期の構造と考えられる。

腰曲輪数は、II期はEクラス(2)→Dクラス(12)へ、III期Dクラス(15)→Cクラス・Bクラス(25～35)と増加し、IV期Bクラスが(26)である。

(2) 曲輪面積

II期はEクラス(5,000m²弱)→Dクラス(約14,750m²)→Cクラス(25,000m²弱)へ、III期はDクラス(約15,900m²)→Cクラス(25,000m²弱)→Bクラス(42,000m²)と増加する。外郭部は、II期Eクラス・Dクラスは3,000m²～4,000m²であるが、Cクラスは約5,400m²、III期Dクラスは、約6,600m²と増加し、Cクラス・Bクラス、IV期Bクラスはデータ上は0である。ただ台地下の裾部が概当する可能性が考えられる。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、II期Eクラス・Dクラスに0.3～0.7と僅かに見られ、III期はDクラス(0.8)→Cクラス(1.3)→Bクラス(1.4)と僅かであるが増加傾向がある。IV期には見られない。

堀切数は、II期はEクラスになく、Dクラス(0.7)→Cクラス(1.5)と、III期はDクラス(1.3)→Cクラス(3.0)へと僅かに増え、Bクラスは0.2と減少するが、IV期Bクラスは4.0と増加する。

縦堀数は、II期はEクラス(0.3)→Dクラス(0.8)へ僅かながら増加するがCクラスは0.5と減少する。III期はDクラス(1.6)→Cクラス(3.8)と増加し、Bクラスは0.4と減少する。IV期Bクラスは7.0と増加する。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、II期はEクラス(70m弱)→Dクラス(約230m)と増加し、Cクラスは140mと減少する。III期はDクラス(270m余)→Cクラス(約310m)→Bクラス(約640m)と増加するが、IV期Bクラスは420mと減少する。

土塁の長さは、II期Eクラス(100m弱)→Dクラス・Cクラス(約200m)→III期Dクラス(250m)→Cクラス(370m)→Bクラス(430m余)と増加し、IV期Bクラスは280mと減少する。

土塁状尾根は少ないが、II期Eクラスは7m、Dクラスにはなく、II期Cクラス・III期Dクラス(10m余)→III期Cクラス(23m)と増加し、以降はない。

(5) 特殊構造

折り歪みは、II期Eクラス・IV期Bクラスにはなく、II期Dクラス(0.7)→Cクラス(1.5)→III期Dクラス(2.1)→Cクラス・Bクラス(3.0前後)と増加する。

明確な桁形虎口は、II期各クラスに0.1~0.5、III期はDクラス・Bクラスに0.1~0.2存在する。

不明確な桁形虎口は、II期Eクラス・Cクラス・IV期Bクラスにはなく、II期Dクラス・III期Dクラスに0.2と僅かに存在し、III期Cクラス・Bクラスに0.5前後と若干見られる。

馬出しは、II期各クラス・IV期Bクラスにはなく、III期各クラスに0.2~0.3と若干見られる。

全体的には、発展した構造はII期は少ないが、III期はDクラス→Cクラス→Bクラスの順に増加する傾向と言える。

(6) 地名

「掘之内」はII期Dクラスに僅かに0.1と見られるのみである。

「要害」はII期はDクラスに0.2、III期はCクラスにはないが、Dクラス(0.2)→Bクラス(0.4)と若干増加する。IV期Bクラスにはない。

「城山」は、II期はEクラスに0.3、Dクラスに0.1と僅かに見られ、III期はDクラス(0.2)→Cクラス(0.5)と若干増えるが、Bクラスは0.2と減り、IV期Bクラスにはない。

「根小屋」はII期には見られず、III期の各クラスに0.5~0.6とやや多く、IV期Bクラスにはない。

「宿」は、II期はDクラスに0.1と僅かに見られ、III期はDクラス(0.2)→Cクラス・Bクラス(0.4~0.5)とやや増加し、IV期Bクラスにはない。

全体的には、「要害」・「城山」はII期からIII期にかけて増加し、「根小屋」はIII期にのみ、「宿」はIII期に城主クラスが高い程多く見られる傾向がある。

5. 海匠地域 (第76図~第83図)

(1) 曲輪数

主要郭数は、II期Dクラス(篠本城跡・見廣城跡他)(2.9)→III期Dクラス(大浦城跡・飯高城跡他)(3.0)→III期Cクラス(新城跡他)・Bクラス(中島城跡)(5.0)と増加する。

腰曲輪数は、II期Dクラス(11)→III期Dクラス(16)と増加し、III期Cクラスは(12)とやや減少するがBクラスは16と増加する。II期Dクラスについては、見廣城跡が22と多いが、台地先端部から延びる尾根(丘陵地形)に占地するためであろう。

(2) 曲輪面積

II期は14,200m²余、III期はDクラスが15,400m²弱、Cクラスが約11,300m²だが、Bクラス(中島城跡)は120,000m²弱と突出して広くなる。海匠地域では中島城跡が外郭部も58,000m²と際立って大規模であるが、他は小規模である。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、II期Dクラス(0.6)→III期はDクラス・Cクラスが0.7~1.0であるが、Bクラスでは3.0と増加する。

堀切数は当地域は少なく、II期Dクラスが2.8、III期はDクラスが2.3、Cクラスが3.0、Bクラスが2.0と2～3前後であり、比較する程の差はない。

堅堀数は、II期Dクラスが0.6、III期はCクラスにはなく、Dクラス・Bクラスが2.0～3.3と若干存在する。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、II期Dクラス(約190m)→III期Dクラス(250m余)と増加し、III期Cクラスは110mと減少するが、Bクラスは710mと突出する。

土塁の長さは、II期Dクラスは約240mであるが、III期は若干減り、Dクラス(150m)→Cクラス(280m)→Bクラス(330m)と増加する。

土塁状尾根は、当地域には存在しない。

(5) 特殊構造

折れ歪み数は、II期Dクラス・III期Dクラス・クラスは1.0と少ないすが、Bクラスでは3.0と増加する。

明確な桁形虎口はII期にはなく、III期Dクラス(0.7)→Cクラス(1.0)と増加し、Bクラスにはない。

不明確な桁形虎口は、データの中では当地域には存在しない。

馬出しは、III期Cクラスに1.0と見られるのみである。

全体的には、発展した構造は、II期は少ないがIII期に城主クラスが高い程増加する傾向である。

(6) 地名

「堀之内」は、III期Dクラスに0.3、Bクラスに1.0と見られるのみである。

「要害」は、II期Dクラス(0.1)→III期Dクラス(0.3)→Cクラス・Bクラス(1.0)と増加する。

「城山」は、II期Dクラスに0.1と篠本城跡のみに見られるのみである。

「根小屋」はII期にはなく、III期Dクラスに0.5と見られるのみである。

「宿」は、当地域のデータではない。

全体的には、「要害」が多く、「城山」・「宿」は少ないようである。また、「根小屋」はIII期のみに見られる。

6. 山武地域(第84図～第99図)

(1) 曲輪数

主要郭数は、II期が2前後、III期が2～4、IV期が4と増加し、V期(松尾城跡)は2と減少する。松尾城跡は、従来の日本城郭とは異質である洋式城郭をめざしており、計画段階であったため内部を仕切る施設も未完成であるためと言えよう。

腰曲輪数は、千葉県北部の中では数が多く、II期はDクラス(埴谷周路遺跡・岩山城跡 8)→Cクラス(田間城跡 48)、III期はEクラス(木原城跡 3)→Dクラス(山中城跡・大網城跡他 12)→Cクラス(山室城跡・飯櫃城跡・田向城跡・大台城跡・坂田城跡 29)→Bクラス(東金城跡・土気城跡 65)へ増加する。IV期はBクラス(成東城跡)が6である。しかし、II期の腰曲輪数は、Dクラスの埴谷周路遺跡は基本的には単郭であること、Cクラスの田間城跡は伝承では東金城に移る前の酒井氏の居城であり規模が大きいことは注意しなければならない。

(2) 曲輪面積

II期はDクラス(約4,650m²)→Cクラス(約22,600m²)へ、III期はEクラス(4,500m²弱)→Dクラス(12,300m²)

→Cクラス(40,000m²弱)→Bクラス(約44,000m²)と増加する。なお、V期(松尾城跡)の面積は164,000m²と突出するが、計画段階で内部の仕切りもなく、この中に外郭部も含むと考えられる。外郭部はⅢ期Cクラスで6,000m²だが、Ⅳ期Bクラスは約24,000m²と広大になる。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、Ⅱ期はDクラスが0.7でCクラスにはなく、Ⅲ期はEクラスが1.0、Dクラスが0.5であるが、Cクラス・Bクラスは1.5~1.8と若干増加し、Ⅳ期Bクラスは5.0と突出する。なお、V期Bクラスにはない。

堀切数は、Ⅱ期はDクラス(1.3)→Cクラス(4.0)と増大し、Ⅲ期はEクラスになく、Dクラスは2.8、Cクラスは1.4であるが、Bクラスは4.0と増大し、Ⅳ期Bクラスにはなく、V期Bクラスには1.0と若干存在する。

竪堀数は、Ⅱ期はDクラスにはなく、Cクラスは2.0と若干存在する。Ⅲ期はEクラスにはなく、Dクラス・Cクラス(2.2)→Bクラス(2.5)とⅡ期よりもやや増え、Ⅳ期Bクラスにはなく、V期Bクラスは1.0と僅かに存在する。

以上の堀の種類の変遷は、例えば、東金城跡が丘陵に、土気城跡や成東城跡が台地に占地する様に、時期や城主クラスに関わらず、むしろ丘陵城郭と台地城郭が併存する地域のためと考えられる。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、Ⅱ期Dクラスは110m余あるが、Cクラスは160mと増加し、Ⅲ期はEクラスが350mあるが、Dクラス(230m余)→Cクラス(約600m)→Bクラス(830m余)と増加し、Ⅳ期はBクラス(760m)であるが、V期Bクラスは200mと減少する。Ⅱ期Dクラスには基本的には単郭方形館の埴谷周路遺跡の例があることから堀の長さが多い。また、V期Bクラスの松尾城跡は計画段階でもあり、発掘調査で周囲に空堀が検出される可能性もある。

土塁の長さは、Ⅱ期はDクラス(150m弱)→Cクラス(80m)と減少し、Ⅲ期はEクラスが270mであるが、Dクラス(170m)→Cクラス(562m)→Bクラス(750m)と増加し、Ⅳ期はBクラスが180mと減少するが、V期Bクラスで2,700mと突出する。

土塁状尾根の長さは、Ⅱ期Dクラスが3m、Cクラスが10mと若干存在し、Ⅲ期以降はBクラスに250mと長く存在するのみである。

全体的には、Ⅱ期が短くⅢ期に城主クラスが高くなる程長くなる傾向があるが、ややばらつきがあるのは、③で触れた様に、時期や城主クラスに関わらず、むしろ丘陵城郭と台地城郭が併存する地域のためと考えられる。

(5) 特殊構造

折れ歪み数は、Ⅱ期Dクラス(0.7)→Cクラス(1.0)→Ⅲ期Eクラス(2.0)→Dクラス(2.3)と徐々に増加し、Ⅲ期Cクラスは7.0と突出するが、Ⅲ期Bクラス(3.0)→Ⅳ期Bクラス(2.0)と少なく、V期Bクラスで12.0と再び突出する。V期Bクラスの松尾城跡は洋式城郭なので、全体的には従来の日本城郭の系譜にはない構造である。

明確な桁形虎口は、Ⅱ期~Ⅲ期Eクラスにはなく、Ⅲ期Dクラス・Cクラスが0.5~0.6と若干存在するが、Ⅲ期Bクラス・Ⅳ期Bクラスにはなく、V期Bクラスで2.0と再登場する。V期Bクラスの松尾城跡の桁形虎口は日本の中近世城郭の流れを踏襲するものである。

不明確な桁形虎口は、やはりⅡ期~Ⅲ期Eクラスにはなく、Ⅲ期Dクラス・Cクラス(0.2)→Bクラス(0.5)

と増加するが、IV期・V期にはない。

馬出しは、同様にII期～III期Eクラスにはなく、III期の各クラスに0.2～0.5と若干存在する。

全体的には、発展した構造はII期は少ないが、III期はEクラス→Dクラス→Cクラスの順に増加し、V期の松尾城跡は全体は洋式ながらも、中近世日本城郭の系列である明確な枡形虎口を備えている。

(6) 地名

「堀之内」は、III期Bクラスに0.5と見られるのみである。

「要害」は、III期Dクラスに0.2と僅かに見られるのみである。

「城山」もII期にはなく、III期にDクラス(0.2)→Cクラス(0.4)と若干増えるが、BクラスとIV期・V期にはない。

「根小屋」も「城山」同様、II期にはなく、III期Dクラス(0.5)→Cクラス(0.6)と若干増加するが、BクラスとIV期・V期にはない。

「宿」はII期にはなく、III期Eクラス(1.0)→Dクラス(0.7)→Cクラス(0.4)と減少するが、Bクラスで1.0と若干増加する。IV期・V期にはない。III期の下級城主クラスに多く見られるのは、在地に直結した城館跡であるためであろうか。

全体的には、「要害」・「城山」・「根小屋」・「宿」はII期にはなく、III期に登場し、IV期・V期には見られなくなる傾向である。

7. 長生地域 (第100図～第114図)

(1) 曲輪数

主要郭数は、II期はEクラス(碓城跡・下芝原城跡他 1.3)→Dクラス(小林城跡・利根里城跡他 3.5)→Cクラス(石神城跡 9.0)へ、III期はDクラス(榎本城跡他 2.8)→Cクラス(真名城跡・本納城跡・勝見城跡・一宮城跡他 5.5)→Bクラス(長南城跡 8)へと増加する。

腰曲輪数は県内で最も多い地域であり、II期はEクラス(7)→Dクラス(18)→Cクラス(101)と増加し、III期はDクラス(19)→Cクラス(66)→Bクラス(122)と増加する。上位クラスは兎に角随所に平場を造成する傾向があり、II期のCクラスからIII期Bクラスへ受け継がれる様である。なお、一宮城跡は近世に加納藩陣屋が築かれたが、内部に築かれたので、全体の構造はIII期の遺構と考えられる。ただ、破壊が著しいので参考資料である。

(2) 曲輪面積

II期はEクラス(約1,160㎡)→Dクラス(7,000㎡弱)→Cクラス(20,300㎡)へ、III期はDクラス(6,600㎡余弱)→Cクラス(約18,400㎡)→Bクラス(約36,800㎡)と大幅に増加する。当地域の外郭部は、データ上はないが、斜面の腰曲輪の集合体として機能した可能性がある。ただ、どの部分が外郭部に相当するかの判断は難しい。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、III期Cクラスに0.5と僅かに存在するのみである。

堀切数は、II期はEクラス・Dクラスが4前後、Cクラスは2.0であるが、III期はDクラス(5.0)→Cクラス(9.5)→Bクラス(21.0)と大幅に増加する。

竪堀はII期にはなく、III期Dクラス(1.0)→Cクラス(1.8)→Bクラス(2.0)と若干増加する。

横堀セット数は、県内では安房地域と並んで少なく、逆に掘切数は最も多い地域であるのは、馬の背状の尾根を有する丘陵地形であるからであろう。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、II期はEクラス・Dクラス(50m余)であるが、Cクラスは15mと減少する。III期はDクラス(65m)→Cクラス(165m)→Bクラス(180m)と目立って増加する。

土塁の長さは、II期はEクラスが40mであるが、Dクラスは24mと減少し、Cクラスにはない。III期はDクラス(40m弱)→Cクラス(130m余)と増加するが、Bクラスは40mと減少する。

土塁状尾根は、II期はEクラスにはないが、Dクラス(90m弱)→Cクラス(720m余)と増加し、III期はDクラスが215mであるが、Cクラスは約130mと減少し、Bクラスで1,400mと突出する。

丘陵地帯のため、空堀・土塁は短い土塁状尾根が目立つ地域である。

(5) 特殊構造

折れ歪みは、II期EクラスとIII期Dクラスに0.3、Cクラスに0.2と若干存在するのみである。

明確な枡形虎口・不明確な枡形虎口共、当地域には見られない。

馬出しは、III期Cクラスに0.3と若干存在するのみである。

丘陵地帯のため、発展した構造である折れ歪み・枡形虎口・馬出しは、全体的に少ない傾向であるが、III期Cクラスに若干見られる。

(6) 地名

「掘之内」は、II期Eクラスに0.3、III期Dクラスに0.2と見られるのみである。

「要害」はII期にはなく、III期はDクラスに0.3と若干見られるが、Bクラスは1.0と増加する。

「城山」は、当地域のデータ内では見られない。

「根小屋」はII期にはなく、III期のDクラスに0.3、Cクラスに0.2と若干見られる。

「宿」もII期にはなく、III期にはDクラスに0.5、Cクラスに0.3と若干あるがBクラスは1.0と増加する。

全体的には、「城山」は見られず、「要害」・「根小屋」・「宿」はIII期に登場する。

8. 夷隅地域 (第115図～第127図)

(1) 曲輪数

主要郭数は、II期はDクラス(中滝城跡 3)→Cクラス(最明寺裏城跡 3.6)へ、III期はDクラス(大野城跡・矢竹城跡・鶴ヶ城跡他 4.0)→Cクラス(布施殿台城跡・城ヶ谷城跡・金山城跡・吉宇城跡・興津城跡 4.5)→Bクラス(万喜城跡・勝浦城跡 9.0)へと増加する。V期Bクラス(大多喜城跡)は9である。

腰曲輪数は、II期がDクラス(9)→Cクラス(26)へ、III期はDクラス(29)→Cクラス(64)→Bクラス(83)へ増加し、V期Bクラスは61である。

(2) 曲輪面積

II期Dクラス(約3,400㎡)→Cクラス(7,000㎡弱)→III期Dクラス(約28,500㎡)→Cクラス(32,800㎡余)の順に増加し、BクラスはCクラスとほぼ同規模の約32,300㎡、V期Bクラス(大多喜城跡)は約124,400㎡と突出して広大となる。III期Dクラスのみ外郭部が存在するが、鶴ヶ城跡の外郭部が広大なためである。大多喜城跡は台地裾部の広大な曲輪を外郭部と捉えた方がいいかもしれない。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、II期からIII期Dクラスまでなく、III期はCクラス(0.3)→Bクラス(0.5)と少ないながらも若干増加し、IV期にはない。

堀切数は、II期は4.0前後であるが、III期はDクラス(4.5)→Cクラス・Bクラス9.0~10.0と増加し、IV期Bクラスはほぼ横這いで8.0である。

竪堀は、II期にはなく、III期Dクラス(2.0)→Cクラス(5.4)→Bクラス(6.0)と増加するが、V期Bクラスは2.0と減少する。

横堀が少なく堀切が多い傾向は長生地域と同様であるが、竪堀が多いのは夷隅地域の特徴と言えるであろう。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、II期Dクラスは100mであるが、Cクラスは約50mと減少し、III期はDクラス(約220m)→Cクラス(約310m)と増加し、III期Bクラスは50mと減少するが、V期Bクラスは230mと再び増加する。III期Bクラスが短いのは万喜城跡や勝浦城跡で丘陵城郭のためであろう。

土塁の長さは、II期Dクラス・Cクラス(約30m)→III期Dクラス(約180m)と増加し、Cクラスで約140mと減少するが、以降III期Bクラス(195m)→V期Bクラス(300m)と増加する。

土塁状尾根の長さは、II期はDクラス(30m)→Cクラス(140m余)、III期はDクラス(100m余)→Cクラス(150m)→Bクラス(440m)と増加するがV期Bクラスは10mと減少する。

全体的には、堀・土塁はII期が短く、III期は城主クラスが高い程長くなり、V期は更に長くなる傾向があるが、III期Bクラスの短い堀等占地地形によりばらつきはある。

(5) 特殊構造

折れ歪みはII期にはCクラスで0.1と僅かに登場し、III期はDクラス(1.0)→Cクラス(1.3)と若干増え、BクラスにはないがV期Bクラスで1.0と再登場する。

明確な桁形虎口はII期にはなく、III期Cクラスに0.1と僅かに存在するのみである。

不明確な桁形虎口もII期にはなく、III期Cクラスに0.3と若干存在するのみである。

馬出しは当地域のデータでは存在しない。

全体的には、発展した構造はIII期Cクラスにやや多く見られるが、長生地域と同様、丘陵地形が多い地域なので、少ない傾向と言える。

(6) 地名

「堀之内」は、II期Cクラスにのみ1.0と見られる。

「要害」はII期にはなく、III期のDクラスに0.5、Cクラスに0.1のみである。

「城山」は、当地域のデータでは存在しない。

「根小屋」はII期にはなく、III期Dクラスに0.5、Cクラスに0.4のみである。

「宿」もII期にはなく、III期Bクラス(0.5)とV期Bクラス(1.0)のみである。

全体的には、「堀之内」はII期に、「要害」・「根小屋」はIII期に、「宿」はIII期以降に見える。

9. 市原地域 (第128図~第136図)

(1) 曲輪数

主要郭数は、II期Dクラス(平蔵城部田城跡・吉沢城跡他 3.5)→III期Dクラス(池和田城跡・真ヶ谷城

跡他 3.0) と若干減少するがⅢ期Cクラス(椎津城跡・佐是城跡・分目要害城跡他)は3.7とやや増加する。

腰曲輪数は、Ⅱ期(9)→Ⅲ期(25~27)と大幅に増加する。なお、Ⅲ期Cクラスの分目要害城跡は台地裾部から沖積地の主要部のみで、台地上の平場群も関連遺構とすると更に増えるものである。

(2) 曲輪面積

Ⅱ期は約3,400m²と極めて狭く、Ⅲ期はDクラス(約15,700m²)→Cクラス(約62,600m²)へ増加する。外郭部はⅡ期にはなく、Ⅲ期Cクラスの椎津城跡にのみ3,400m²存在する。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、Ⅱ期Dクラスにはなく、Ⅲ期はDクラス(1.2)→Cクラス(2.0)と増加する。

堀切数は、Ⅱ期Dクラス(2.5)→Ⅲ期Dクラス・Cクラス(1.3)と減少する。

竪堀数は、Ⅱ期Dクラス(0.5)→Ⅲ期Dクラス(1.3)と増え、Ⅲ期Cクラスは0.3と減少する。

時期・城主クラスに関わらず、全体に堀切・竪堀は少ない地域であるが、堀切数がⅢ期に減少するのは、占地在丘陵から台地に移ったためであろう。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、Ⅱ期Dクラス(40m)→Ⅲ期Dクラス(約260m)→Cクラス(690m)と大幅に増加する。

土塁の長さは、Ⅱ期Dクラスにはないが、Ⅲ期Dクラス(150m余)→Cクラス(373m)と増加する。

土塁状尾根の長さは、Ⅱ期Dクラス(10m)→Ⅲ期Dクラス(約25m)へ若干増加するがCクラスにはない。

全体的には、Ⅱ期からⅢ期へ長くなる傾向であるが、土塁状尾根がⅢ期Cクラスに見られないのは堀切・竪堀と同様、占地在台地上に移動したためであろう。

(5) 特殊構造

折れ歪みはⅡ期には存在せず、Ⅲ期はDクラス(2.0)→Cクラス(2.7)と若干増加する。

明確な柵形虎口もⅡ期には存在せず、Ⅲ期Dクラスにのみ0.3と若干存在する。

不明確な柵形虎口は、当地域のデータには見られない。

馬出しの数は、Ⅱ期には存在せず、Ⅲ期Dクラスにのみ0.2と僅かに存在する。

全体的には、発展した構造は、Ⅱ期は見られず、Ⅲ期に登場する。

(6) 地名

「堀之内」は、Ⅱ期Dクラスに1.0であるが、Ⅲ期Dクラスは0.3と減少し、Cクラスには見られない。

「要害」はⅡ期にはなく、Ⅲ期にDクラス(0.3)→Cクラス(0.7)と増加する。

「城山」は、Ⅱ期Dクラスに0.5見られるが、Ⅲ期のDクラス・Cクラスは0.2~0.3と減少する。

「根小屋」はⅡ期にはなく、Ⅲ期はDクラス(0.2)→Cクラス(0.3)と若干増加する。

「宿」は、Ⅱ期Dクラスに1.0と見られるが、Ⅲ期はDクラスに0.3のみである。

全体的には、「堀之内」・「城山」はⅡ期に、「要害」はⅢ期に、「根小屋」はⅢ期にやや多い傾向である。

10. 君津地域(第137図~第152図)

(1) 曲輪数

主要郭数は、Ⅱ期Eクラス(高谷館跡群 1.5)→Ⅲ期Dクラス(高谷堀之内城跡他 3.3)→Cクラス(笹子城跡・中尾城跡・天神山城跡他 4.8)→Bクラス(真里谷城跡・峰上城跡・小糸城跡・造海城跡 7.8)と増加し、Ⅴ期Cクラス(飯野陣屋跡・真武根陣屋跡)は3.5と少なく、Bクラス(佐貫城跡・久留里城跡)は

6.5である。

腰曲輪はII期がなく、III期はDクラス(7)→Cクラス(29)→Bクラス(118)と増加し、V期はCクラス(6)→Bクラス(74)へ増加する。ただ、V期のCクラスとBクラスは、陣屋と城郭という差があり、特に後者は既に16世紀後半には概ね現状となっていたことが想定され、注意しなければならない。

(2) 曲輪面積

II期Eクラス(2,500m²弱)→III期Dクラス(11,000m²弱)→Cクラス(約27,000m²)→Bクラス(32,000m²強)の順に増加する。V期はCクラスが96,600m²強、Bクラスは45,000m²強である。外郭部はIII期Dクラス(4,000m²強)→Cクラス(約8,700m²)→Bクラス(約9,600m²)→V期Cクラス(約32,500m²)と増大するが、V期Bクラスにはデータ上はない。V期Cクラスは飯野陣屋跡が60,000m²と広大である。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、II期Eクラスは0.5であるが、III期はDクラス(0.3)→Cクラス(1.5)と増え、Bクラスにはなく、V期Cクラスに2.0と若干存在する。

堀切数は、II期Eクラス(0.5)→III期Dクラス(1.3)→Cクラス(8.2)→Bクラス(10.4)の順に増加し、V期はCクラスになくBクラスは9.0と増加する。

竪堀数は、II期にはなく、III期Dクラス(0.7)→Cクラス(3.2)→Bクラス(10.2)の順に大幅に増加し、V期はCクラスになく、Bクラスは5.5である。

当地域は特にIII期Cクラス・Bクラスに堀切と竪堀が目立ち、竪堀は県内でも最も多い地域である。また、V期Cクラスは台地と沖積地の陣屋跡のため、堀切や竪堀は存在しない。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、II期Eクラス(70m)→III期Dクラス(157m)→Cクラス(343m)→Bクラス(486m)の順に長くなり、V期Cクラスは1,220m弱、Bクラスは300mである。

土塁の長さは、II期Eクラス・III期Dクラス(130m弱)→Cクラス(232m)→Bクラス(488m)の順に増加し、V期Cクラスは1,340m弱と突出し、Bクラスは330mである。

土塁状尾根はII期にはなく、III期Dクラス・Cクラスが90m余であるが、Bクラスが80m弱とやや減少し、V期はCクラスにはなく、Bクラスは455mと突出する。

全体的には、II期は短い、III期は堀・土塁共Dクラス→Cクラス→Bクラスの順に増加し、V期はBクラスがIII期Bクラスより若干短くなり、Cクラスは土塁状尾根以外は突出する。これは、Bクラスが久留里城跡・佐貫城跡という戦国末期の里見氏本城を利用した丘陵城郭で、Cクラスが台地や沖積地上の陣屋跡であるからと考えられる。

(5) 特殊構造

折れ歪みは、II期～III期Dクラスまで存在せず、III期はCクラス(3.2)→Bクラス(1.8)とやや減少し、V期はCクラスが4.0と多く、Bクラスは0.5と少ない。

明確な桁形虎口も、II期～III期Dクラスまで存在せず、III期Cクラス(0.3)→Bクラス(0.2)とやや減少し、V期はCクラスが1.5と多く、Bクラスにはない。

不明確な桁形虎口は、II期～III期CクラスとV期には存在せず、III期Bクラスにのみ0.2と僅かに存在する。

馬出しも、II期～III期DクラスとV期には存在せず、Cクラス・Bクラスにのみ0.2と僅かに存在する。

全体的には、発展した構造は、III期Cクラス・Bクラスに見られ、しかもCクラスの方が若干高い。これ

は、Cクラスに笹子城跡・中尾城跡等武田氏系列の城郭の例が多くあり、上位Bクラスの里見氏系城郭より構造的に技巧的な特徴を有していたことによるものと考えられる。

(6) 地名

「掘之内」は、当地域のデータには見られない。

「要害」は、II期Eクラス～III期Dクラスにはなく、III期Cクラス・Bクラスに0.3～0.4と若干見られるが、V期にはない。

「城山」はII期にはなく、III期Dクラスに0.3、Bクラスに0.2であるが、V期Bクラスは1.0と多く見られる。

「根小屋」はII期～III期Dクラスにはなく、III期Cクラスに0.5、Bクラスに0.2と見られる、V期にはない。

「宿」もII期～III期Dクラスにはなく、III期Cクラスに0.3、V期Cクラス・Bクラスに0.5と見られる。

V期Bクラスに「城山」が見られるのは、佐貫城跡・久留里城跡がIII期の城郭を再利用したためであり、全体的には、「要害」・「城山」・「根小屋」は、II期・III期の下位・V期には見られず、III期の上位城郭に多い傾向がある。

11. 安房地域 (第153図～第164図)

(1) 曲輪数

主要郭数は、I期Dクラス(下ノ坊館跡 1.0)→II期はDクラス(石堂城跡他 2.0)→Aクラス(稲村城跡 5.0)へ、III期はEクラス(山本城跡 1.0)→Cクラス(西郷氏館跡・山之城城跡 2.0)→Bクラス(宮本城跡・葛ヶ崎城跡・用田要害城跡他 2.5)→Aクラス(岡本城跡 5.0)へ増加し、IV期Aクラス(館山城跡)は4.0である。ただ、稲村城跡は更に広域に斜面の平場が広がり、後世の畑や植林によるものの可能性があるため城域が未確定であるが、里見氏の初期の城なので、主郭のある尾根を中心とする範囲が考えられる。

腰曲輪数は、I期がなく、II期はDクラス(9)→Aクラス(75)と増加し、III期はEクラス(2)→Cクラス(13)→Bクラス(116)と増加するが、Aクラスは58である。また、IV期のAクラスは75である。III期はAクラスとBクラスが逆転している様相であるが、Aクラスが里見氏本城、Bクラスが正木氏系で、腰曲輪を多く造成する正木氏系状郭の特徴が表れているのではないかと考えられる。

(2) 曲輪面積

I期は15,600㎡、II期はDクラス(8,700㎡弱)→Aクラス(34,000㎡強)へ、III期はEクラス(1,700㎡)→Cクラス(約15,500㎡)→Bクラス(約20,800㎡)→Aクラス(約50,000㎡)へと増加する。IV期は60,000㎡弱である。ただ、館山城跡は、築城途中で里見氏が転封されたと見られるので、城下町整備も含め全体は更に広大な面積となった可能性がある。外郭部はデータ上当地域にはないが、長生地域同様、腰曲輪の集合体として機能した可能性が考えられる。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、I期Dクラスに1.0と存在する他にはない。

堀切数は、I期Dクラスにはなく、II期はDクラス(2.3)→Aクラス(3.0)、III期はEクラス・Cクラス(1.0)→Bクラス(4.0)と増えるが、Aクラスは3.0であり、IV期Aクラスは1.0と減少する。

竪堀数は、I期Dクラスにはなく、II期Dクラス(0.7)→Aクラス(2.0)とやや増え、III期はEクラスになく、Cクラス(0.5)→Bクラス(3.5)と増えるが、Aクラスは1.0と減少し、IV期Aクラスにはない。

当地域は、横堀は少ない。堀切・竪堀がIII期にはAクラスよりBクラスの方が多いが、曲輪数の項で触れた様に、Aクラスが里見氏系、Bクラスが正木氏系の差であろう。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、I期Dクラスは410mと約1町四方の方形館跡であり、II期はDクラス(60m)→Aクラス(250m)と増加し、III期はEクラスが50mであるが、Cクラス(30m)→Bクラス(175m)と増加し、Aクラスは50mと減少する。IV期Aクラスは10mと短い。ただ、IV期Aクラスの館山城跡は周囲の沖積地に堀(水堀)が巡っていたことも推測され、築城途上であったことも考慮するとかなり長い堀となる。

土塁はI期Dクラスにはなく、II期Dクラス(17m)→Aクラス(180m)と大幅に増加する。III期はEクラス(60m)→Cクラス(35m)→Bクラス(25m)と減少し、III期Aクラス(100m)→IV期Aクラス(220m)と増加する。

土塁状尾根はI期・II期にはなく、III期のCクラスが105mと長く、Bクラス(約40m)→Aクラス(100m)と増加し、IV期Aクラスにはない。

全体的には、I期Dクラスは約1町四方の堀を巡らし土塁のない方形館跡である。堀・土塁共基本的にはII期→III期→IV期と長くなるが、土塁のIII期が城主クラスが上位程短くなるのは先述の様に正木氏系城郭と里見氏城郭の差であろうか。

(5) 特殊構造

折れ歪みはI期Dクラスに0.5と見られるのみである。

明確な桁形虎口は、当地域のデータ内には存在しない。

不明確な桁形虎口は、IV期Aクラスで1.0と存在するのみである。

馬出しも当地域のデータ内には存在しない。

全体的には、I期に若干折れ歪みが見られるが、明確な桁形虎口や馬出しはII期・III期にはなく、IV期に不明確な桁形虎口が登場する。里見氏系城郭の特徴であろうか。

(6) 地名

「掘之内」はI期・II期には見られず、III期Eクラスにのみ1.0と存在する。I期の沖積地の方形館跡にこの地名が残存しないのは通説的ではない。「掘之内」はむしろII期(15世紀後半)の遺構である可能性も考えられる。

「要害」はI期には見られず、II期Aクラスに1.0、III期Bクラスに0.5と見られ、IV期にはない。

「城山」もI期には見られず、II期Aクラスに1.0、III期Bクラスに1.0と見られ、IV期にはない。

「根小屋」は、I期・II期・III期には見られず、IV期Aクラスのみに1.0と見られる。このIV期Aクラスの館山城跡は16世紀末から築城が開始されており、III期後半に付いた名称と考えられる。

「宿」は、I期・II期には見られず、III期Aクラスに1.0と見られるのみである。

全体的には、「掘之内」はII期に、「要害」・「城山」はII期とIII期の上位クラスに、「根小屋」・「宿」はIII期に見られる。

第4節 まとめと課題

1. はじめに

本章では、第1節で千葉県内の中近世城館跡の計測したデータや概念図等を提示し、第2節で千葉県内の地域別特色を概括し、第3節で地域別に時期や城主クラスの差を検討した。なお、度々触れたが、各城館跡の時期や城・城主クラスについての判断はまず文献史料と発掘調査成果を元にしたが、資料のない多くの城館跡については規模・縄張り構造・地名等を総合して判断した。つまり、従来の文献史学や発掘調査の成果により中世城館の構造・機能の変化がおおよそ判明しており、中近世を通して歴史的背景の元に発展進化することを前提として仮定したものである。以下、第2節・第3節の検討成果をまとめてみたい。

2. 地域別特色

中近世城館は、まず、地域支配の拠点として集落や耕地との関係が重要であり、第2に特に戦国期には地形に即していかに有効な防御施設を造るかが課題となる筈である。その意味で、千葉県は北部が台地形と樹枝状谷津、南部が丘陵地形と比較的広大な沖積地で、中央部がその両者併存するという多様な地形があることから、地域別特色は地形の差が大きいと考えられる。第1節でデータを検討した結果を改めて簡単にまとめてみたい。なお、以下おおよそ東飾・印旛・千葉地域を北西部、香取・海匝・山武地域を北東部、長生・夷隅・市原地域を中央部、君津・安房地域を南部として述べたい。

- (1) **立地** 正に県内の地形に即した結果となった。つまり、基本的には、北部は台地上、南部は丘陵と沖積地、中央部は両者併存である。地形内の位置については、北部が先端部、南部が奥、中央部が両者併存である。比高については、北部が低く南部が高くなる。
- (2) **曲輪数** 中央部から南部が40～50と多く、北西部が10以下と少ない。これも基本的には地形によるものであるが、第4節で後述する領主の築城意識も現れていると考えられる。
- (3) **曲輪面積** 主郭部は北西部が広く中央部の長生地域が狭くなり、腰曲輪は中央部の面積が広い。また、外郭部は北西部が広大である。これらはやはり地形と領主の差であろう。ただし、丘陵地形の城郭でも腰曲輪の集合体として外郭部の機能を有した可能性は高い。
- (4) **空堀** 横堀が北西部に多く、次いで中央部に多い。堀切数は中央部に多く、北西部に少ない。縦堀は夷隅・君津地域が突出するが他にはあまり見られない。堀の長さは北西部が長く、次いで中央部、短いのは長生・安房地域である。これは基本的には地形に左右されている。
- (5) **土塁の長さ** 空堀と同様な傾向であり、両者共地形に左右されている。
- (6) **発展した構造とした折れ歪み・枡形虎口・馬出し** 北西部と山武地域に多く、長生・安房地域が少ない。これは、丘陵城郭が山自体が要害性が高いのに比べて、台地城館は比高がなく平らなために工夫が必要であったことが第1であるが、領主層の築城意識も現れていると考えられる。なお、留意しなければならない点として、第1節でも触れたが、折れ歪みについては、丘陵城郭は地形に沿って造成するのみでも平場（曲輪）が折れを有しその数は膨大になるので、基本的には空堀に伴うものとした結果、台地城館には多く丘陵城郭には少なくなってしまった。空堀は丘陵地形の様な比高のある急斜面のない台地に丘陵地形のような斜面を造り出す意味があると考えられる。空堀を伴わず意識的に折れを造成したものは丘陵地域でも夷隅・市原・君津地域に多い。つまり、丘陵城郭は未発展な構造なのではなく、それだけで要害性

は非常に高いのである。

(7) **地名** データ自体が全体構造がわかるものにとどめたために参考でしかない。「堀之内」は千葉・夷隅・君津地域に少ない。「要害」は北東部・中央部・南部に多い。「城山」はばらばらで、東飾・香取・山武・市原地域に多く、印旛・千葉・海匝・長生・夷隅地域に少ない。「根小屋」は香取・山武・夷隅地域に多く、長生・安房地域に少ない。「根小屋」がこの地域に少ないのは空堀・土塁の長さ・発展した構造等についても同様であり、比高があり馬の背状の尾根を有する地形と領主層の築城意識や権力構造の差と考えられる。

3. 領主別特色

(1) **千葉氏** 千葉東飾・千葉・印旛・香取・海匝地域は、平安時代末期以来千葉氏一族が樹枝状に解析された小谷津を生産基盤として各地域に広がった。この歴史的地理的背景が中世前期に台地上に多くの小規模方形館を形成したものと見られる。次いで戦国期前半（15世紀後半）には、千葉宗家・原氏・高城氏・大須賀氏・国分氏等が小規模在地領主層を取り込み領域を拡大しそれに応じた大規模城郭を構えるが、小規模在地領主層は未だ在地を基盤とした本城を構えていたことが推測される。ところが、戦国期後半（16世紀前葉以降）に広域領主層は小規模在地領主層の各城館を廃城または臨時的な砦と化し、16世紀半ば以降の後北条氏の進出によって技巧的な縄張りや城下町を形成した惣構構造の超大規模城郭（本佐倉城（第40図）・臼井城（第41図）・小金城（第19図）等）を造成したと考えられる。

(2) **井田・山室氏** 山武地域北部は、戦国期前半に内陸寄りの細長い谷津を生産基盤として、井田・山室氏が本拠とした（山室城（第92図）・田向城（第94図）等）が、戦国期後半には山室氏が飯櫃城（第95図）へ、井田氏が大台城（第93図）へと栗山川流域の長大な沖積地へ進出し、16世紀後半には井田氏が山室氏を含め周辺在地領主層を取り込み、東部の広大な沖積地を望み後北条氏の影響を受けた技巧的な坂田城（第96図・図版10-1）を築城する。田向城跡は発掘調査では16世紀後半の遺物はほとんど検出されなかったが、技巧的な縄張り構造は明らかに後北条氏の影響と考えられ、居住性は少ないが当該期の城郭であり、或いは井田氏の居城として天正18年に登場する文献上の「大台城」は、田向城に比べて技巧的ではないことから、実はこの田向城の可能性もあるのではないだろうか。

(3) **東金酒井氏** 山武地域南部は、戦国期、土気・東金両酒井氏が領域とした。東金酒井氏は九十九里平野を望む丘陵斜面全体に平場を造成する城郭を築城し、伝承では田間城（第86図）から東金城（第97図）へ移動したとのことであるが、いずれも丘陵の斜面に数多くの平場を造成する手法で、後者は規模が大幅に増大している。

(4) **土気酒井氏** 土気酒井氏は、戦国期前半に台地上に大規模城郭である土気城（第98図）を築城したが、戦国期後半の恐らく16世紀後半に後北条氏の影響で技巧的な縄張りに改造し、城域も大幅に拡大していると考えられる。

(5) **長南武田氏** 長生地域は、戦国期に長南武田氏が長南城（第114図）を本城に領域を形成したが、東金城同様、丘陵斜面全体に平場を造成する大規模城郭を築城した。戦国期前半から後半にかけては平場をさらに造成していき城域を拡大させていった過程と考えられる。大きな特徴として、尾根筋の脇に帯曲輪の様に平場を連続させることによって、尾根を土塁や通路として機能させる「土塁状尾根」が随所に見られる。

(6) **真里谷武田氏** 市原・君津地域は、戦国期前半に真里谷武田氏が真里谷城（第148図）を本城に領域を

拡大した。同地域は丘陵と台地の両者併存地域であり、比高のある丘陵ではあるが、頂部はある程度の平坦面を有する地形に占地し、技巧的かつ斜面に多くの平場を造成するという山武地域と長生地域の城郭を合わせたような大規模城郭を築城したと考えられる。一族内の内乱と里見・後北条氏の勢力争いのため、16世紀前葉には勢力を失うが、15世紀後半から16世紀前葉にかけては、城域を拡大させる過程であったと考えられる。

(7) **土岐氏** 夷隅地域北部は、戦国期に土岐氏が領域とした。丘陵と台地地形の併存する地域であるが、丘陵地形の万喜城(第126図)、台地地形の鶴か城(第119図)共に、斜面に数多くの平場を有し、尾根に平行した垂直の壁を造成する大規模城郭を築城するが、あまり技巧的ではないのが特徴といえる。

(8) **正木氏** 夷隅地域南部から安房地域北部は、戦国期正木氏が領域とした。城谷城(第120図)・金山城(第121図)のように頂部に若干の平坦部を有する丘陵地形を利用して技巧的な城郭を築城するが、斜面の平場は長生地域ほどの密度はない。正木氏は、戦国期後半には里見氏の重臣的位置にあるが、度々反乱を起こす等半独立的であった。安房地域にあっては主君である里見氏よりも技巧的な城郭を築城したと言えよう。

(9) **里見氏** 君津南部から安房地域にかけては、戦国期里見氏の領域であった。比高のある丘陵地形であるが、頂部は狭く、斜面に平場を造成し、大規模だが正木氏に比べあまり技巧的でない城郭を築城したと言える。本城を稲村城(第157図)→久留里城(第151図)→佐貫城(第152図)→岡本城(第163図)→館山城(第164図)と移したが、久留里城・佐貫城は当初は真里谷武田氏による築城と考えられ、戦国末期から近世にかけて築城された館山城は築城途中ながら主要部には明確な枳形虎口等が見られないことはそれを物語るものと考えられる。

4. 県内中近世城館の変遷

第3節では地域別に各項目ごとに時期、城・城主クラスの差をまとめたが、ここでは千葉県内中近世城館の時期的変遷を概略して本節のまとめとしたい。

I期(12世紀～15世紀前半・中世前期)

県北部から中央部の台地上では1辺40m～50mで低い土塁や浅い空堀を巡らせた小規模方形館(印西市小林城跡古段階・四街道市池ノ尻館跡(第21図)・同市東作城跡・千葉市南屋敷遺跡(第44図)・長南町埴谷周路遺跡(第85図)等)が、中央部から南部の沖積地では土塁を伴わず浅い空堀を巡らせた1辺100m余(1町)の方形館(鋸南町下ノ坊館跡(第153図)・鴨川市西郷氏館跡(第154図・図版12-2)等)が造られる。また、台地上では光町篠本城跡(第76図・図版9-1)・四街道市館ノ山遺跡(図版3)のように、沖積地では長南町岩川館跡(図版10-2)のように空堀で区画した屋敷地の集合体の例も存在する。これらの階層としては、有力名主層が考えられ、単郭構造のものは有力名主層でも土豪クラスといったより上位に位置するものと考えられる。なお、「掘之内」地名はこの段階のものより後出の場合が多いことが考えられる。

II期(15世紀後半～16世紀初頭・戦国期前半)

県北部から中央部の台地上では、小規模方形館を改造して周囲に郭や腰曲輪を配置した防御を意識した城郭が、中央部から南部の丘陵では頂上近くの斜面に平場を造成した小規模城郭(山城)が築かれる。前者の例としては、印西市小林城跡の発掘調査(第22図)で明らかとなった。これらは、名主層が武力を有

して1村から数村程度の領域を有した小規模在地領主層と考えられるが、国人領主層はそれらを支城としてさらに規模の大きな本城を築く。地名では、「要害」・「城山」が付けられることが多い。また、「宿」地名も登場し始める。

Ⅲ期（16世紀前葉～16世紀末・戦国期後半）

県内全体で、Ⅱ期よりも更に広大な領域を有する在地領主層（国人領主層）や戦国大名によって、Ⅱ期の小規模城郭が取捨選択されて、廃城されるか常駐しない純軍事的機能を有した砦的な城郭に変化すると考えられる。広域領主層は曲輪面積を増大させ、北部の台地城郭は外郭部を造成し、南部の丘陵城郭は平場を更に増加させる。北部では更に後北条氏の進出によって、直線的な折り歪み・明確な枡形虎口・馬出し等も多く出現し、縄張り構造的には技巧に優れた城郭が出現し、本佐倉城（第40図）・臼井城（第41図）・生実城（第50図）・小金城（第19図）のように城下町を取り込んだ惣構構造も登場する。地名では、「要害」・「城山」に加えて、山下に「根小（古）屋」地名が付けられるものが多い。「根小屋」は、城主・家臣団の居住区と考えられてきたが、発掘調査によって山上の曲輪にも生活痕跡が見られることは、或いは「根」は「寝」の意味ではなく、単に山の麓の意味で、この時期家臣の城下集住が見られる証はないかと推測され、改めてその性格を検討しなければならないだろう。

Ⅳ期・Ⅴ期（16世紀末～19世紀・近世）

天正18年（1590）、小田原城をはじめ後北条領国の諸城が落城し、房総にも安房の里見氏を除き徳川家臣団が入部する。その後、江戸に近いために60程の多くの藩と旗本の知行地が入り組む形となっていくが、明治時代初めの廃藩置県まで廃藩・改易が繰り返された。城持ち大名の多くはⅢ期の主要城郭を再利用しているが、藩のクラスにより規模は異なる。矢作城（第75図）は、Ⅲ期Bクラスの城であったが鳥居元忠が4万石で入部し、水戸の佐竹氏対策と考えられる。佐貫城（第152図）は内藤家長が2万石、久留里城（第151図）には大須賀忠政が3万石でⅢ期のAクラス（里見氏）を引き継ぎ、大多喜城（第127図）はⅢ期にはBクラスと推定されるが本多忠勝が増築して10万石の藩となる。これらは里見氏を抑える役目であったと推測されている。また、水上交通の要所として関宿城を居城とした関宿藩（松平氏2万石）の例もある。なお、城を持たずに陣屋を構えた藩も多い（高岡・小見川・多古・生実・鶴牧・飯野・一宮・加知山等）。生実藩の森川氏が構えた森川陣屋は、生実城の一部を利用している（第50図）が、深い堀をわざわざ埋めて浅い堀を巡らした方形館状の構造となる。一方、新規に造られた飯野陣屋（第150図）は大規模であり折り歪みを多く使い虎口に明確な枡形を造る等発展した構造となるが、沖積地に立地するため防御的には弱くなる。これらは城持ち大名の城とは明確に差がつけられた。全国的には国主（国持）・準国主・城主・城主格・無城（陣屋）のランクがあった。

近世城郭の典型としては、17世紀初めに築城された佐倉城（第43図）があげられる。発掘調査の結果、15世紀代の中世の堀の一部が検出され、直下には「根古屋」地名も残るので、Ⅲ期の城郭を大幅に改造したものであろう。周囲の低地に水堀を巡らせ、折り歪みや枡形虎口や馬出しを多用し、天守閣を有し、家臣団屋敷地や城下町を備える。しかし、建物の礎石では石を使用するが、一般の近世城郭の要素である石垣が存在しないことは、千葉県北部が石を産出しない地域であることに起因すると考えられる。

また、天守閣を有し、城下町を形成する近世城郭ではあるが、中央部から南部の佐貫城・久留里城・大多喜城等は、中世段階同様に技巧的な構造とは言えない。これは、丘陵地形によるものであろう。結局、中世段階でも地形に左右された構造であった証となるものと考えられる。

特異な例として、御茶屋御殿（第51図）と松尾城（第99図）があげられる。前者は、徳川将軍の東金方面鷹狩りのために造られた御成街道沿いの御茶屋御殿がある。方形単郭ながら明確な枡形虎口を有するもので、中世城館の発展形が17世紀の館に反映されたものであろう。松尾城は明治初年に稜堡式の洋式城郭をめざして築城が進められたが、築城途中で廃藩置県を迎え廃城となった。五稜郭に類する鋭角の突出部を随所に有する全体構造は従来の日本城郭にはないものであるが、虎口は中近世の日本城郭の系譜を正当に受け継ぐ明確な枡形虎口を用いている。この松尾城をもって千葉県いや日本の城郭は終焉を迎えたと言えよう。

以上、要約すると次のとおりである。中世城郭は、単郭構造の段階から時代と領主規模の大きさに比例して複郭化と腰曲輪の造成が行われ、構造も技巧的となる。やがて、取捨選択されて、「根小屋」（城下の家臣団居住区）を有する規模の大きな城や、外郭部・城下町を有する惣構構造の大規模城郭に取り込まれるものもある。近世では、戦国期の取捨選択が「一国一城令」の廃城へつながり、さらに格式・家格の差が明確化されていく。しかし、以上は単一線上の発展ではなく、各地域で地形に即した構造を有した点が重要であろう。

なお、近世城郭が石垣や鉄砲狭間を設けたのは小銃対策であり、幕末に登場した稜堡式城郭の鋭角の突出部は大砲射撃を目的としたものであり、近現代の「城郭」は、戦車砲・航空機爆撃・ミサイル等から防衛するために大砲・ミサイル・対空火砲等を備えてコンクリートや鉄板で造られる「要塞」へと続く。近代、房総沿岸に設置された砲台は要塞の最初の形態であろう。移動式城郭（要塞）とでも形容できるのは、戦艦・航空母艦であろう。これらは「城郭」が、武器の進化によって変化したことを物語るものであろう。

5. 課題

第3節では地域毎に各城館の時期・城及び城主クラスを仮定してその変化を追ったが、地形や領主の築城思想に左右されながらも、県内全体では、基本的にはほぼ同様な変遷（発展過程）が確認された。つまり、仮定はおおよそ証明されたということと考えられる。ただ、領域範囲で推定した城主クラスの差のみでは判断できないものとして、特に16世紀後半の臨時的な城館があることを考慮しなければならないだろう。計測データについては、土塁・空堀は破壊や埋没があること、斜面の腰曲輪も埋もれたものがあると推測されること等は考慮しなければならない。さらに、紙数の都合上、計測データの項目の内、本章で記述していないデータも多い。主郭・II郭・III郭と仮定して計測した結果は今後の検討課題であり、その面積比の比較は新たな知見を得るものであろう。また、本章は、全体構造が判明する城館に限ったので、地名については、城域あるいは周辺のどの部分に位置するかを含めて、今後改めて個々の検討が必要であろう。

本章は、千葉県内の中近世城館についての地域や領主の違いに伴う規模・構造等の変遷をたどることを目的として、概念図や測量図が存在する200以上の城館跡について、従来試みられなかった曲輪等の面積や土塁・空堀等の長さを計測したデータを作成し、時期、城・城主クラス等を仮定したが、近年中世城館の変遷が明らかにされつつある中で、いくつかの新知見を交えながらも、基本的には数値化することによってそれを証明したものではないかと考えられる。

第2章 検出遺構について

第1節 障子堀の分類と編年

井上哲朗

1. はじめに

近年は、全国的に中近世城館跡の発掘調査が増加し、堀底に地山を掘り残すことによって仕切りを造る構造の堀が多く検出されてきた。千葉県内でも松戸市小金城跡・多古町多古城跡等は新聞記事にも取り上げられ、その他の城館跡でも数多く検出されているが、その名称は「障子堀」・「堀内障壁」・「畝堀」等と呼ばれ、特に統一性はない。城郭研究者としては、「障子」を明障子の棧の形態に由来するものとして、堀内部に仕切りが格子状に広がるものを「障子堀」、一つ一つが直線的につながる形態を「畝堀」と捉える傾向がある。井上は、1998年『第15回全国城郭研究者セミナー』で「堀内障壁の分類と編年試案—千葉県内の事例を中心として—」と題した報告を行ったが、その際のレジメ作成時では、私自身も「障子」を明障子の格子状の棧に由来するものと考えていた。しかし、『同セミナー』における小笠原清氏（小田原城郭研究会）の報告によって、そもそも「障子」は部屋の内外を仕切る障屏具の一種で、襖障子、唐障子、衝立障子、通障子、明障子、硝子障子等の種類があり、江戸時代の軍学で使用された「障子堀」・「堀障子」の用語も堀内の仕切りを示す言葉であること等が指摘された。よって、本節は、井上報告及びそれをまとめた「同題」（『中世城郭研究』第13号（1999年）所収）^{②-377}の内容を、小笠原氏の報告を踏まえた上で「堀内障壁」を有する堀を「障子堀」として捉え、更に内容を改めて検討したものである。

なお、「障子堀」は、山中城跡で検出された空堀がその代表的な例として取り上げられるため、後北条氏の下総支配に関連づけて考察されることが多い。しかし、近年は、後北条氏の影響を受けた16世紀後半の下総地域でも、出土遺物が16世紀前葉以前の城館跡で「障子堀」が検出される例が増えたことにより、疑問視されてきたといえよう。「障子堀」は、千葉県内のみならず、全国的にも多くの形態が検出されているので、これらの機能や系譜を整理するために、まず、小笠原氏の報告に従い江戸時代の軍学に見える「障子堀」の用語と当時の研究を紹介し、それを踏まえた上で各城館跡検出の遺構について分類を行い、最後にその系譜や年代等について考えてみたい。

2. 用語・機能について

まず、江戸時代の軍学で使用された「障子堀」について、小笠原氏の報告で紹介された史料を提示して考えてみたい。

「障子堀」・「堀障子」を記載する主な軍学書を年代順に並べると、山鹿素行（山鹿流）『兵法神武雄備集』（寛永19年（1642））、北条氏長（北条流）『兵法雄鑑』（正保2年（1645））、北条氏長（北条流）『士鑑用法』（正保3年（1646））、山鹿素行『武教全書』（明暦2年（1656））、有澤武貞（有澤流）『兵法拔書疋夫之抄私解』（宝永4年（1707））、津軽耕道（山鹿流）『武教全書諸説詳論家伝秘抄』（正徳3年（1713））、広瀬寛常（北条流）『城制図解』（享保20年（1735））、窪田清音（山鹿流）『武教全書 弘化本』（弘化4年（1845））、同氏『武教全書詳解』（文久元年（1861））、同氏『武教全書解』（幕末）等である。この三流派は、武田家の『甲陽軍

鑑』（17世紀初頭高坂昌信著）で知られる甲州流（武田流）を祖としているが、同書や関連史料には見えない。つまり、史料上は、17世紀中葉から登場したものと言える。以上の中からの抜粋を紹介する。

・有澤武貞『兵法拔書 夫之抄私解』（1707年）

「障子堀

カラホリノ内ニ、少キ土居ニテモ柵ニテモ付置、敵堀ノ内迄入テモ、障子ニ障ル所ヲ塀櫓等ヨリ打也。又平城ノ水堀ニテモ、タテ横ニ罅ヲ残シヲケハ、水モ一度ニ不引シテ能也。」

・津軽耕道『武教全書諸説詳論家伝秘抄』（1713年）

「○ 山の見立武功の事

一 地形水引の考 付水底障子の事

山城には地に高下ある故、敵より低き方を見切りて堀の水を堀切りて落すことあり。故に切落さるる処なき様に水を用ふべし。或は又其の方には矢倉を上げ、番兵を置きて堅固にすべし。尤も要害に受たる堀にても池にても、水底に障子をすべし。其の利多し。

○ 堀之事

一 堀障子の事

私に曰はく、広き堀には堀の底に堀様あり。堀様と言うは、水下にみえざるやうに幾筋も十文字に畦障子切かきを仕り置き、広さ或は一尺、或は二尺ばかりにも、乃至それより細くとも、縦横に仕置くべし。其の徳第一、忍の者付くことなり悪し。云心は、水底に処々に障りある故、自由に水中を往来することなからざるが故也。第二、敵堀を乗るとも、水下の障りに隔てられ、士卒連って越悪し。第三に縦横に障りあれば、水底自ら滞って深泥、深田の如く溜るもの也。第四に、処に由って要害を此上に結ぶこと之れあり。第五に、内より秘に外へ人を出すには、又便なることもあり。

又言はく、障子といふは堀様の仕方を云う也。障子なければ水一度に出でて堀悪し、故に請取々々の場所を定めて、その間々に堀掛けをするを障子と云ふ。堀出来て、水底、右の障子を其の儘置く時は、人馬足たまりの害となる也。

又言はく、山城の堀障子と云うは、地形不直なるゆえ、水持ちの為に横に堤の如く筋を立置くこれも障子と言う。平城にもあるべし。但し是れは下の箇条に出でたり。

一 地形水引の処ほりやうの事

地形水引の処とは、一方下りなる地を云ふ。此処を常の如く掘れば、水低き方へ落ちて持悪し。故に処々に堤の如く横に水を溜め切って、山城の堀障子の如くする也。」

・窪田清音『武教全書』（弘化本）（1845年）

「ほりを掘る時、縦横にうねを立て掘るを軍詞に堀障子と言う。」

・窪田清音『武教全書詳解』（1861年）

「堀ノ内ニ横ニウネヲ立テホル其ウネヲ堀障子ト言。」

「水障子ト言ハ、水底ヲ仕切土居ヲ中ニ築キテ仕切ヲナスコト也。其土居ヲ障子ト号ス。」

「水仕切ハ堀障子ノ大ヒナル高キモノヲ、堀ノ内ニ処々残シ置、是ニテ水ヲ、タタヘ留メオクノ設ケ也」

「堀ヲ一段々々ニ畦ヲ立テ、水ヲタタヘ置ク仕方也、是ヲ場ニ依リテハ柵ト云フ。山ノ中腹へ幾段ニモ柵ノ様ナル物ヲ作りテ水ヲ集メ、溜オク仕方也」

「小口ヲ土橋ニシテ水ヲタモタス工夫有ベシ」

・窪田清音『武教全書解』（幕末）

「堀ノ水下土井ノ如クニ縦横ニ掘残ス、尤水下三四尺斗ニ有常ノ堀ニハ無之。」

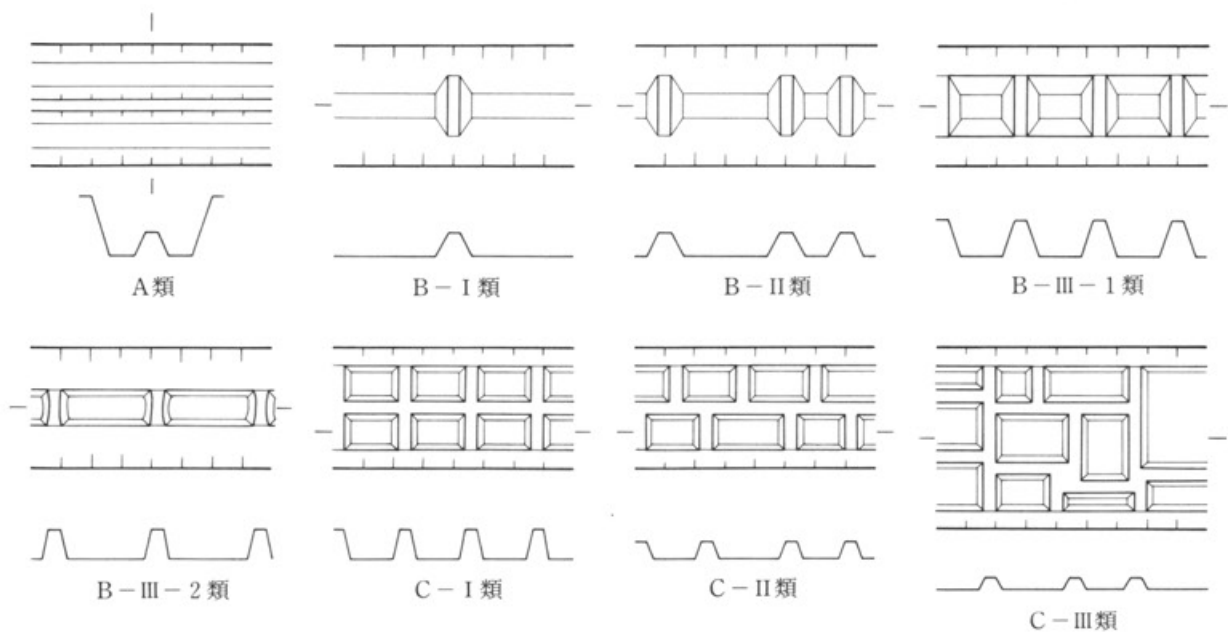
以上によれば、まず、「堀障子」が全て堀内の水が深く関連していることに気づく。つまり、平城の広い堀については、水の下に見えないように障害を造ることだけではなく、堀内に保水しそれによって底が泥状となることにより敵の動きを阻止し、さらに秘かに城外へ人を出すには便利であるとする。また、山城についての「障子堀」も堀に水を引き、保水の為としている。勿論、これらの軍学は、中世の城館跡の施設を江戸時代になってから考察したものであり、全てが中世時における認識とは言えないが、台地上の障子堀に関しては保水機能も考慮する必要があるだろう。実際、発掘調査で検出される台地上の堀にはなかなか水がたまらないが、近年、15世紀後半は現在よりも低気温が続き、不作が続いたという説が有力となっていること、また、篠本城跡・北ノ作遺跡・田向城跡など、堀底に水溜土坑と考えられるものや井戸が掘られる例も多いので、地下水位の変化を考慮する必要があるだろう。

3. 分類試案 (第174図)

堀内障害の施設としては、障壁だけではなく、段差・竖穴（陥穴）逆茂木等があり、障害となる堀そのものの形態としては葉研堀、堀に密接に関連する障害としては土橋があげられよう。堀内障害施設の中でも堀内障壁（障子）を持つ堀（障子堀）は、平行畝・畝状堀・方形の仕切りが連続する堀等多くの形態が検出されているので、次のように分類した。

（A類）堀底に堀の方向に沿って平行に畝が造られているもの。

（B類）堀底内に障壁が単独或いは一列に連続するものとし、さらにⅠ～Ⅲ類に細分した。



第174図 障子堀分類模式図

- B-I類 障壁が単独或いは二カ所に存在するもの。
- B-II類 障壁がある程度の距離をおいて不規則に連続するもの。
- B-III類 障壁が規則的に連続し、方形の竪穴が一行に連続するようになるもの。

事例の多いB-III類をさらに細分すると、

- 1類 竪穴の平面形が円形から方形。
- 2類 竪穴の平面形が細長い楕円形から長方形。

(C類) 堀底内に障壁が二列以上連続し平面的に広がるものとし、さらにI~III類に細分した。

- C-I類 障壁によって造られる竪穴が規則的に連続し、障壁が十字の規則的な連続に見えるもの。
- C-II類 障壁によって造られる竪穴の堀に平行する軸の長さがまちまちで、障壁がT字が不規則に連続して見えるもの。
- C-III類 障壁によって造られる竪穴規模の長軸・単軸共まちまちで、障壁の十字・T字が広域に連続して見えるもの。低地の幅広い堀に障壁の高さが低く水田の畦状となる。

これらの機能や目的は、2で紹介した江戸時代の軍学史料によると、各類共、敵が堀底を移動するのを阻むものであるが、A類は保水とは関係ない施設、B類・C類は保水に関係するものであろう。

4. 全国の城館跡の障子堀分類 (第6表)

全国の堀内障壁が検出された調査例は、先述の『第15回全国城郭研究者セミナー』(1998年)及び『中世城郭研究』第13号(1999年)における池田光雄氏の「^{②-376}障子堀」について」で報告された。その資料に基づき、3の分類試案に沿って千葉県内以外の城館跡検出の障子堀について列挙すると、第6表のとおりである。なお、調査範囲内で一部が検出されて詳細な分類が不可能なものは除外した。

これによると、①障子堀は東北から畿内にかけて広く分布すること、②関東、特に埼玉県・千葉県北部・静岡県等、16世紀後半には後北条領国化した地域に多いこと、③古代豪族館跡(宮城県山前遺跡)でも類似遺構が検出されていること、④明らかな後北条氏系城郭はB-III類の方形竪穴列が多いこと、⑤C類は沖積地の水堀に造られる例が多いこと、⑥C-III類は、現段階では埼玉県にのみ見られ、地域的特徴の可能性があること、⑦障子堀は、城域の外縁部や大規模城郭の外郭に造られる傾向があること、⑧B-III-2類は少なく、千葉県内では松戸市小金城跡(図版1-1)・千葉市生実城跡(図版7-2)のみであること、⑨小金城跡の障子堀は、堀の方向に対して直交する溝の列状を呈しており、他では管見の限り、他には神奈川県河村城跡だけに見られるに珍しい形態であること、等があげられる。

5. 編年試案 (第7表)

発掘調査による出土遺物から、城館の時期がわかるものについて抽出して障子堀の分類試案を当てはめてみた。

代表的な例として、神奈川県小田原城跡では、16世紀末から17世紀初頭の久保氏の時期石垣の使用の水堀のC-II類が、16世紀代の後北条氏の時期の石垣を使用しない水堀のB-III類を切っ^{④-111}て造られていることから、C類はB類よりも後出であることがわかる。また、C-II類は、埼玉県花崎城跡・小田原城跡のほか、愛知県清洲城跡・京都府御土居跡・旧二条城跡等の織豊系城郭に見られ、16世紀第4四半期の出現の傾向がある。

第6表 全国の城館検出障子堀形態

遺跡名	所在	時期	B I類	B II類	B III 1類	B III 2類	C I類	C II類	C III類	備考	挿図・写真図版
柏山館跡	岩手県金ヶ崎町	15世紀代か			○						
我妻館跡	山形県米沢市	15世紀代		○							
山前遺跡	宮城県子牛田町	古墳時代		○	○					豪族居館	
洞ノ口遺跡	宮城県仙台市	15世紀代		○							
北目城跡	宮城県仙台市	16世紀末			○		○			伊達氏	
鎌田館跡	福島県福島市	15世紀代		○	○						
名倉館跡	福島県郡山市	15世紀代		○	○						
保原城跡	福島県保原町	15世紀代か			○						
若松城跡	福島県会津若松市	17世紀初頭			○					蒲生氏、外郭堀	
梅津山城跡	新潟県両津市	15世紀代			○						
上中居辻薬師遺跡	群馬県高崎市	15世紀代か			○						
割目遺跡	茨城県阿見町	15世紀代か									
下小池城跡	茨城県阿見町	15世紀代か			○						
伊奈城跡	埼玉県伊奈町	16世紀代			○						
花崎城跡	埼玉県加須市	15世紀後半～ 16世紀代			○			○	○		
滝ノ城跡	埼玉県所沢市	16世紀後半			○					後北条氏	
岩槻城跡	埼玉県岩槻市	16世紀代				○				後北条氏	
騎西城跡	埼玉県騎西町	16世紀代							○	後北条氏	
南屋敷遺跡	千葉県千葉市	15世紀前半		○						屋敷外縁堀一辺	第44図
神山谷遺跡	千葉県匝瑳郡光町	15世紀前半			○					篠本城対岸台地縁辺部	
小林城跡	千葉県印西市	15世紀前半～ 15世紀後半	○							方形館跡周囲築研堀	第22図
多古城跡	千葉県香取郡多古町	15世紀代			○					台地を切る城域端部	
笹子城跡	千葉県木更津市	15世紀後半	○							北端部腰曲輪	第139図
北ノ作遺跡	千葉県四街道市	15世紀後半～ 16世紀前葉			○					主要郭西端部、底に井戸を有する箱堀を切る。	第37図・図版1
分目要害城跡	千葉県市原市	15世紀後半～ 16世紀前葉			○					主要部北端部（微高地）	第135図
田向城跡	千葉県山武郡芝山町	15世紀後半 （～16世紀末）			○					II郭中央堀、井田氏、後北条氏系	
小金城跡	千葉県松戸市	15世紀後半～ 16世紀末	○			○				城域北端金杉口、高城氏（後北条氏系）	第19図・図版1
生実城跡	千葉県千葉市	16世紀末				○				惣構東端部、原氏（後北条氏系）	第50図・図版7
本佐倉城跡	千葉県印旛郡酒々井町	15世紀後半～ 16世紀末			○					小谷斜面惣構堀、千葉宗家（後北条氏系）、大堀館跡（16世紀末）の可能性有り。	※
小田原城跡	神奈川県小田原市	16世紀代			○	○	○			外郭水堀、後北条氏	
河村城跡	神奈川県山北町	16世紀代				○				後北条氏系	
小田原城跡	神奈川県小田原市	16世紀末～17世紀初頭						○		外郭石垣使用水堀、前期大久保氏	
葦山城跡	静岡県葦山町	16世紀代			○					後北条氏	

遺跡名	所在	時期	B I類	B II類	B III 1類	B III 2類	C I類	C II類	C III類	備考	挿図・写真図版
山中城跡	静岡県三島市	16世紀後半			○		○			後北条氏、西ノ丸周辺	
小川城跡	静岡県焼津市	15世紀後半～16世紀か		○				○		後北条氏系か	
松田城跡	静岡県新居町	15世紀代か									
長久保城跡	静岡県長泉町	16世紀代			○					後北条氏、水堀	
清洲城跡	愛知県清洲町	16世紀後半～17世紀初頭						○		水堀、織豊系	
御土居跡	京都府京都市	16世紀後半						○		水堀、織豊系	
旧二条城跡	京都府京都市	16世紀後半						○		水堀、織豊系	
福住井之市城跡	奈良県天理市				○						
大坂城跡	大阪府大阪市	16世紀末～17世紀初頭						○		三の丸水堀、織豊系	

※平成12年1月発掘調査。情報提供・勲印旆郡市文化財センター。

第7表 障子堀の出現時期（案）

	15世紀				16世紀				17世紀				
	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期		第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
								前期	後期				
B-I・II類	—————												
B-III類			—————										
C-I・II・III類							—————						
関東の政治的状況	小規模台地上館・低地館の消滅	築城ラッシュ	戦国期の開始、中小城郭	国人領主間勢力紛争	城館跡の取捨選択・一方で大規模城郭出現	上杉・里見氏対後北条氏、国人領主間紛争継続	下総地域後北条氏の影響に入る	後北条氏系城郭、豊臣方	後北条氏系城郭、豊臣方	後北条氏系城郭、豊臣方	後北条氏系城郭、豊臣方	後北条氏系城郭、豊臣方	後北条氏系城郭、豊臣方

千葉県内の例では、下総地域が後北条氏の影響下に入る時期は、16世紀後半以降であるのに、B-I・II類は出土遺物からみた時期では15世紀前葉には出現している。また、B-III類も16世紀前葉までの城館で出現している。後北条氏系城館に多く見られるB-III類の方形竪穴列の障子堀については、千葉県内では、光町神山谷遺跡^{①-091}・四街道市北ノ作遺跡^{②-363}（第37図・図版4-1、5-1）・市原市分目要害城跡（第178図）^{①-091}で検出されているが、遺物は神山谷遺跡が15世紀代、後二者が16世紀前葉で止まっていることから、在地

で発展した可能性もある。

しかし、注意しなければならない点は、出土遺物がないということは生活痕跡がないことであるが、16世紀後半の東国においては、瀬戸美濃製品の搬入量が減少し漆器が代用された可能性があり、また、大規模城郭に取り込まれて常駐しない純軍事的機能を有した城郭へ変化した可能性も考えなければならない。例えば、B-III類の芝山町田向城跡や前述の北ノ作遺跡^{③-231}の出土遺物は16世紀前葉で止まっているが、果たしてその時点で機能を閉じたか否かである。田向城跡は、城主井田氏が後北条氏との繋がりが深く、構造から見る限り16世紀後半の様相を示し、唯一16世紀後半以降の遺物として土塁覆土中から鉄砲玉が出土している。また、北ノ作遺跡の外郭部では若干16世紀後半の遺物も出土しており、この時期の城本体は臨時的な砦的機能を有した可能性もある。これらの検討のためには、明らかに16世紀後半或いは後北条氏に関連した城館として捉えられる文献史料を伴う城館の発掘成果が望まれる。しかし、いずれにしてもB-III類は15世紀末以降16世紀代で出現したことが推測される。

また、千葉県内では、現段階ではC類が検出されていないが、微高地で検出された障子堀としては唯一市原市分目要害城跡(B-III類)があり、B-III類も保水機能を一つの目的としたものであることの証拠となろう。

C類については、京都市二条城跡・御土居跡のII類は、堅穴が浅いこと、埼玉県騎西城跡・花崎城跡のC-III類は沖積地の城館で障壁は水堀内であること、小田原城跡・大阪市大坂城跡三の丸も水堀であること等から、C-II・III類の堅穴の浅いものは、沖積地の広大な水堀内に造られるようである。

さて、これらから、堀内障壁の出現時期については、B-I・II類が15世紀前葉から15世紀後半、B-III類が15世紀末から16世紀末、C類が16世紀末から17世紀初頭に推定される。当時の歴史的背景を含めると、B-I・II類は防御性の薄いもので、生活用水や水利を第一目的とした保水機能であったが、15世紀後半以降戦国の動乱に突入して防御性の強い城館が必要となってB-III類が出現し、16世紀第4四半期の関東では豊臣勢の関東侵攻に対抗して整備され、その過程で低地の城館の堀にC類が出現したことが推測される。

6. まとめとして

以上、現在までの管見の限りの発掘調査事例からは、障子堀の構造の系譜として、15世紀前葉にB-I類が出現し、B-II類へ発展し、さらに15世紀後半にB-III類へ発展したこと、B-III類からC類のI・II・III類のそれぞれへ発展したものではないかと考えられる。B-III類の出現時期である15世紀末期は、戦国の動乱が本格的になり、千葉県内は勿論、全国的に城館が多く築城される時期である。つまり、B-III類は、I・II類以上に防御機能を重視して造られたものであろう。そして、障子堀は後北条氏系城郭の特有のものではなく、各地域で発展したものであった。しかし、後北条氏系特有のB-III類の方形堅穴列の障子堀も存在したであろうことは現段階では否定できない。また、C類の出現は、埼玉県騎西城等の沖積地の城館の水堀の防御に有効であると共に、小田原城跡や大坂城跡等の例から、石垣により深い堀を造ることができ、保水機能も整備された結果ではないだろうか。つまり、歴史的には、C類は中世城郭から近世城郭への移行期に多く出現したものではないかと考えられる。江戸時代の軍学や発掘調査で堀底に検出される井戸や水溜土坑の存在も考慮すると、千葉県内の台地上の城館跡の障子堀に多いB-III類も、保水の観点から見直す必要があろう。

なお、障子堀の類似遺構は、古墳時代の豪族居館（宮城県山前遺跡ほか）にも見られるが、弥生時代の環濠集落（佐賀県吉野ヶ里遺跡ほか）や古代ヨーロッパの石垣を使用しない城郭が、周囲に屈曲を持った土塁・堀を巡らせ、内部の「郭」は突出部を有すること等、日本における中世城郭の発展した構造に近い例がある。これら防御を意識した縄張りを始めとした構造の工夫については、各時代の戦乱の時期に生み出されては消えていったものと考えられる。その中で、障子堀については、15世紀後半に防御機能を重視した施設が造られ16世紀末に最も発展したが、その消滅は、石垣の登場による深く保水機能の整備された堀の出現によるものと捉えることができる。換言すれば、障子堀の消滅は、城館遺構に現出した中世の終焉と近世の幕開けを象徴するものではないだろうか。

第2節 地下式坑のデータ分析

豊田秀治

1. はじめに

中近世城館跡には様々な遺構が存在する。郭や堀、虎口と言った城館の主要な施設については、戦闘時の防御的機能を有するものとしてその性格が明らかであるが、地下式坑については、城館の貯蔵施設・葬送施設とするものや、城館構築以前の貯蔵施設・葬送施設とするものなど多様な解釈がなされている。このような模糊とした有様なのは、これまでの城館跡調査が発掘を伴わない歩測による縄張り遺構等の表面観察が主流であり、数少ない発掘調査例も、城館跡のごく一部分であったことに原因するものであろう。したがって部分的な調査によって地下式坑が検出されても、それが城館跡全体の中で占める位置を求めることは不可能に近い状況であったと考えられる。ところが近年の大規模開発は、時には城館跡全体を発掘調査の対象として、余すところ無く晒された城館跡からは、幾重にも重なる時代の変遷と、諸施設の状況が城館跡全体を構成する要素の一部として、次第に明らかになってきた¹⁾。

本章は、城館跡検出の遺構について、第1節では障子堀の分類と編年を行なっている。本節では地下式坑について、これまで発掘調査された中近世城館跡で検出された地下式坑の規模や、構造・伴出遺物等をまとめ、墓地など城館跡以外の場所から検出された地下式坑と対比し、検討を加えることによって、中近世城館跡研究に寄与できればと考えている。

2. 研究史

1970年代後半に中田英氏は、神奈川県草山遺跡の発掘調査による成果に基づいて、地下式坑を総合的な分析へ進めた。中田氏は、1976年に草山遺跡の報告書をまとめ²⁾、更に1977年には「地下式坑研究の現状について」と題する論考を発表され³⁾、ここにおいて地下式坑の全国的な集成を行い、その分布・立地・形態・構築年代・機能について論じている。

全国的な分布については、関東・北部九州・琵琶湖周辺に固まって検出されており、他地域ではあまり報告されておらず、この3地域においても、地下式坑の形態におけるバリエーションに違いが認められた。機能については、その構造上、頻繁な出入りを想定し、貯蔵用施設と結論されている。

中田氏に続いて半田堅三氏が、千葉県台遺跡の発掘調査による成果に基づいて、地下式坑の分析を発展させた^{②-112}。

半田氏は、中田氏の地下式坑の形態分類をより精緻なものにし、その機能の解釈において、地下式坑単体だけではなく、その周辺で検出した遺構の存在に注意をはらった。台遺跡においては、火葬跡や、溝・土坑等が検出され、それらの伴出遺物として、常滑の甕や瀬戸の天目茶碗などが確認されている。このことから、中世における台遺跡は墓地であったと判断し、地下式坑についても、「中世仏教を背景にした墓地の内部で機能している施設の一つ」と結論された。

貯蔵施設と葬送施設、異なる機能を想定された地下式坑は、その後江崎武氏が、1985年に文献史料から、葬制に関するものとして半田説を支持している^{②-148}。江崎氏は、中世において禅宗系の葬制に「地を掘りて窖をつくり」と言う例が存在していることや、中世仏教の葬制に、茶器を取り扱うこと、分骨・納骨が行われていること等から、地下式坑の使用想定図をイラストで示された。このイラストは、見るものに強いイン

パクトを与えた。

江崎氏が地下式坑葬送施設説を支持した翌1986年、池上悟氏が地下式坑を葬送施設であるとの前提に立って、全国的な地下式坑の形態分類^{②-158}を行った。池上氏の形態分類は、中田・半田分類と異なり、地下式坑の主室の形態に着目し、その基本形態が関東地方に存在すると結論付けられた。基本形態の存在する関東が、地下式坑の発祥地であり、そのことがパラエティーに富んだ地下式坑を関東地方各地に地域差を持って存在させたとしている。更に、北九州に分布する地下式坑については、遷西御家人による伝播と考え、その造営者が中世武士団であることを強調された。

同年、東京都五反田遺跡の報告において、地下式坑を伴う中世遺構群が、自然のヘコタミに手を加えた段切状遺構に伴う墓域とされた。これは、千葉県台遺跡における台地整形遺構に伴う地下式坑の状況とも相俟って、中世社会における葬送空間の存在を想定させるようになる。

地下式坑が葬送施設であるとの論考が増える一方で、貯蔵施設等の論考は、主に近世史において発展することになる。これは、東京都における近世考古学の隆盛において、江戸の街中や、大名屋敷からの地下式坑の検出例が増加し、その配置、出土遺物、文献史料、落語等から貯蔵施設を想定するようになってきた。

地下式坑＝貯蔵施設の考えは、近世社会における遺構として、かつて江戸と呼ばれた地域を中心として存在したものとしてまとめられ、中世社会における地下式坑は、葬送施設として認識されるようになり、その周辺遺構との関わりが検討されるようになる。

かつて半田氏が地下式坑を葬送施設と結論付ける契機となった千葉県台遺跡は、その後も発掘調査が続けられ、新たな遺構の存在が明らかにされるようになり、この成果を基に、半田氏は自説を発展させ、中世の葬送形態を、単に地下式坑だけの問題ではなく、土坑・掘立柱建物等を含む葬送境域の存在へと論を進めている^{②-257}。

中世地下室坑の機能については、遺構単体ごとの分析をとおして、地下式坑を貯蔵施設と考えた中田氏の論考以降、墓域的性格が強い台遺跡における地下式坑の検出例の紹介から、地下式坑が葬送施設として結論付けられ、文献的な補強を伴いながら、台遺跡同様、墓域的性格の遺構が周辺に伴う事例の増加により、地下式坑＝葬送施設との考えが、大勢を占めている。

一方城館跡から検出された地下式坑については、東京都青梅市今井城跡や、松戸市大谷口小金城跡等の検出例から、中田氏は貯蔵施設であると結論する根拠となしている。半田氏は、城館構築以前、或いは廃城後に使用されたもの、又は屋敷墓として城館に伴うものとして、葬送施設説に当てはめていった。しかし池上氏は、その規模が墓域等から検出するものとは異なる点に着目し、葬送施設以外の機能にも注意を呼びかけている。

その後、栃木県等において、地下式坑が城館跡内だけでなくその周辺にも存在することが指摘されるようになり、この現象を齊藤弘氏は、地下式坑＝葬送施設との観点に立って、城館を指向するような位置に墓地を造営したものと評価され、更にこれが発展して、城館内に墓地を造営したのではないかと想定している^{②-329}。

城館跡と地下式坑との関係は、葬送施設・貯蔵施設の機能的問題と、使用期間の同時・先後といった時間的問題が論議されるようになってきた。

このような問題に対して、井上哲朗氏は千葉県小林城跡の発掘成果から、城館の構築以前に地下式坑を

伴う葬送境域が存在したことを導き出された。^{②-286}城館築城以前の葬送境域の存在については、柴田龍司氏も同様の意見を述べている。^{②-300}

また、葬送施設の変遷について笹生衛氏が、房総における中世墓の変遷を論考されたときに、地下式坑を14世紀末から15世紀にかけて、墓域の拡大と共に成立したものと結論され、その背景には、新興勢力の台頭が想起されている。^{②-302}このことから、新たな階層の出現・環境の変遷等が、城館跡等の築造、墓地空間の設定、葬送様式の変化等社会生活そのものに影響を及ぼしているとも考えられる。

墓地的性格を有する遺跡から検出される地下式坑に対して葬送施設の機能を付与するのは妥当性が高いが、部分的な発掘による遺跡の性格解明の多い現状においては、断片からの全容想定が行われる危険性も憂慮すべきかと思われる。城館跡のように、墓地以外の性格を有する遺跡からの検出例を同様の視点で論じることにも問題はあろう。しかし近年においては、遺跡のほぼ全体を対象として、精密な調査が行われ、それによる遺跡内の時間的変遷が明かになり始めており、今一度地下式坑の属性についてまとめる必要があると考える。

今回中近世城館跡から検出された地下式坑をまとめ、その特徴を導き出し、葬送的性格の強い墓地から検出された地下式坑と対比し、その相違を明かにすることを目指し、サンプルとして千葉県内の45遺跡(城館跡19遺跡・墓地26遺跡) 315基の地下式坑を取り挙げた。

3. 検討項目

各遺構ごとに、観察項目を設定し、想定した条件の範囲内で分類を行う。項目と条件については、以下のとおりである。

- (1) **立地** 検出された場所が、台地上か低地か。また台地上としても傾斜の始まる縁辺か、台地の奥の平らな部分か。中田氏の小高く広く乾燥した場所を選地するという説に対し、半田氏が台遺跡の調査で確認された、水の溜まる窪地(後述)や、斜面部にも多く見うけられる例の存在から、何れが主体を占めるのか、或いはその差がそれぞれの地下式坑の機能を反映しているのかを明らかにしたい。
- (2) **占地** 台地整形区画のように、大規模な地山掘削を行っている場合、その内側か縁辺か。そのような地山掘削が行われていないか、行われていたとしても地下式坑とは関係の無い状況か。先に述べたように、半田氏が台遺跡の調査で確認された、台地上に人工的に造られた窪地の周囲、内部に地下式坑が認められる例の存在から、地下式坑の構築に際してその前段階として、大規模な地山掘削を行なっている例がどの程度存在するのかを明らかにしたい。
- (3) **規模** 竪坑の幅・奥行き・深さ、主室⁴⁾の幅・奥行き・高さ・面積・深さ、竪坑底と主室底の段差。地下式坑に対して、出来る限り客観的な観察を行い、各地下式坑における特徴の抽出と、地域的共通性の存否を明らかにしたい。
- (4) **天井部** 構築時の天井の有無。但し、破損が著しく判別できないもの等は不明とした。斎藤氏が栃木県の例において、覆土中に崩落した天井の痕跡が認められないものが存在していることから、構築当初から掘り残しによる天井⁵⁾が存在せず、板等を渡すことによって地下施設を構成したものの存在を指摘しておられる。このことが斎藤氏の言うように、関東ローム層の堆積が薄い北関東の特徴なのか、関東ローム層が厚く堆積する南関東の状況は如何なものなのか、明らかにしたい。
- (5) **竪坑の方向** 台地整形区画が存在してその内側を向いているか、又は存在しないで谷側を向くか、

存在の有無に関わらず谷側を向かないか。先に半田氏が確認した窪地との関係のほか、齋藤氏の考えた天井の保安、掘削労力の節約等がどの程度当てはまるかを明らかにしたい。

- (6) **遮蔽物** 地上から竪坑・主室へと至る部分に、出入りを規制するものが存在するかどうかを明らかにする。通行を阻害する物体を対象とする。
- (7) **付帯施設** 主室や竪坑入り口などに、何らかの機能を有する施設の存在を窺わせる痕跡があるか。上屋や、棚の設置等、地下式坑の空間利用方法を明らかにしたい。
- (8) **出土遺物** 地下式坑の使用に関わる床面直上のもの、使用直後に入り込んだ床面～天井の間、天井崩落後に陥没穴から流れ込んだもの、出土位置がわからないもの、全く無いものにかけて、その内容を明らかにしたい。
- (9) **周辺に見られる遺構** 地下式坑が機能していたときに、その近くに存在していた遺構の有無と、その種類を明らかにする。半田氏が再三に渡って注意を呼びかけている問題で、周辺に存在する同時期の遺構は、地下式坑と有機的な関係を持ち、地下式坑の性格を把握する一助となる。
- (10) **地下式坑と重複する遺構** 地下式坑が機能した前後の時期、またその環境を推定できる。
- (11) **半田氏の形態分類** 有段はY、無段はM、竪坑から主室に至る間に階段の無いものは1、あるものは2、地表から竪坑底に至る階段のあるものは3、竪坑底から主室に至る間に羨道状の部分があるものをa、すぐに主室に至るものをb、竪坑底の一部が主室に直接入り込むものがc、竪坑底がそのまま主室底に至るものをd、竪坑と主室の有り方に関係無く副室の有るものをeとした。
- (12) **池上氏の形態分類** 主室の平面形が縦長なら [長]、正方形なら [S]、横長なら [T]、竪坑と主室の間に高低差があればY、無ければm、竪坑底から主室に至る間に羨道状のものがあればY、無ければm。ただし今回、主室の平面形態が凸字状・円形状のものがあったため、新たに凸字状のものを[凸]、また円形のものについては [r] とした。
- (13) **時期** 報告書作成者が想定した構築の西暦年代である。

以上13項目について城館、墓地において、検出された地下式坑について一覧表に整理し、それぞれの傾向をまとめてみた (第8表)。

4. 城館跡検出の地下式坑

城館跡において検出された地下式坑は、19遺跡109基である。立地は、台地縁辺・台地奥ほぼ同数であるが、一遺跡内でどちらか一方が認められるものと、両者が認められるものとが存在する。台地縁辺のみに存在するものが7遺跡(1基のみのものが4遺跡)、台地奥のみに存在するものが3遺跡、両者が存在するものが3遺跡認められる。これらの内10数基は堀によって一部を破壊され、それ以外のは郭の平坦面から検出されている。

台地整形区画の縁辺や内側に占地するものは、1遺跡6基のみである。但しこの台地整形区画については、掘り残し土塁として報告されているものである。

天井部の有無については、約9割が間違いなく存在していた。ただし不明の6基については、覆土の説明がなされていないものなので、ほぼ全てにおいて存在していたと考えて良からう。

竪坑の方向については、6割が谷側に面しておらず、山側等を向いており、谷や山に対する関心、掘削労力の削減を図る等の意図が存在したとは思えない。

遮蔽物については、僅かに1例が挙げられる。主室底部に白色粘土層が認められたもので、主室を閉塞したものとも考えられるが、不確かである。

付帯施設については16例で、主室底面にピットや周溝が設けられている。排水に対する意識が存在した可能性が窺える。

出土遺物については1/4の地下式坑からは検出されていない。床直や天井以下の覆土から検出された例は27例で、約1/4を占めている。五輪塔や土器・陶器も多少は見られるが、遺物の多くは貝殻や炭化物である。

周辺に見られる遺構としては、ピット群や土坑の様に性格の不明な物が多いが、掘立柱建物や方形竪穴等も1割以上の頻度で確認されている。地下式坑からは若干離れてはいながら、同じ遺跡内において確認された遺構を見ると、火葬施設⁶⁾や、井戸も少数例ながら検出されている。

遺構形態については半田分類におけるYがほとんどで、Mのものは1割にも満たない。Mのものは竪坑と主体部が近接するものが多い。Yにおいては、階段等の施設を持たない素段のものが多く、竪坑と主室が近接するc・d類が多い。竪坑の平面形も方形を呈する1類が若干多い。

池上分類では、Tが約半数を占め、ついでS、長の順になる。各平面形とも有段がほとんどで、更に無羨道のもの9割以上を占める。

形態分類については、段や羨道の有無については、共通した分類であり、有段無羨道のものが多いことを示している。半田分類からは、有段と言っても階段状の施設等を持たないものが多いということが判明している。また池上分類からは、T・S・長の割合がほぼ5：3：2の割合であることが判明している。

5. 墓地検出の地下式坑

墓地において検出された地下式坑は、26遺跡206基である。その立地は、台地の奥が6割を占め、やや多い傾向にあるが、一遺跡内では、台地の奥或いは縁辺に固まっている。両者が認められる遺跡においても、1～2基が奥まったり、縁よりだったりする程度で、大勢は一方に固まる傾向にある。したがって、全体的には、台地の奥だけにかたまった遺跡が多いということになる。

台地整形区画に関わるものが3割強とあまり多くないが、25遺跡中15遺跡において台地整形区画が確認されていない状況であり、台地整形区画そのものは地下式坑の存在に対する必要条件ではないのであろう。

天井部については9割近くが有しているが、存在の怪しいものも9例ほど確認されている。

竪坑の方向については、5割強が台地整形区画なり、谷側なりを向いており、主体部を標高の高い方に構築している。

遮蔽物を有する地下式坑は認められなかった。

付帯施設を有するものは23例で、比率的には城館のものと変わらない。壁溝やピットが多いのも同じだが、少数例ながら龕や棺座を設けている例も認められる。

出土遺物については、半分近くの地下式坑からは検出されていない。床直や天井までの覆土中から遺物が出土したものは12例と全体の1割強である。獣骨や骨粉も見られるが、その多くは土器や陶器の類である。

周辺に見られる遺構としては、溝や土坑・墓壇⁷⁾、火葬施設等が比較的多い。城館では比較的多く認められた掘立柱建物は、墓地においては8例と少数派である。地下式坑からは、若干離れているが、同じ遺跡内において確認された遺構を見ると、粘土貼土坑や、井戸もかなり多く検出されている。

第2章 検出遺構について

墓地検出			立地		占地		規模									天井部			竪坑の方向			遮蔽物							
墓地番号	遺跡名	遺構番号	旧郡	台地縁辺	台地奥	低地	その他	整形区緑	整形区内	無関係	竪坑			主室			高さ			有	無	不明	整形内側	谷側	無関係	有	有りの場合か	無	不明
											幅	奥行	深さ	幅	奥行	深さ	幅	奥行	深さ										
64	宮内遺跡	第11号地下式坑	印旛郡								0.70	1.10	1.50	3.70	1.50		6.66	2.30	0.80										
65	島内遺跡	301号跡	印旛郡								1.60	1.40	2.20	2.10	1.10		2.31	2.20	0.00										
66	島内遺跡	344号跡	印旛郡								1.20	1.40	1.35	2.30	1.50		3.45	1.75	0.40										
67	古屋敷遺跡	第1号室状遺構	印旛郡								1.20	1.20	1.60	2.70	2.40		6.48	1.90	0.30										
68	古屋敷遺跡	第2号室状遺構	印旛郡								0.20	0.30		2.40	2.10		5.04	1.40											
69	江原台遺跡	1号地下式塚	印旛郡								3.80	3.60	2.60	2.15	1.45		3.12	3.45	0.85										
70	江原台遺跡	2号地下式塚	印旛郡								2.40	2.40	2.20	2.00	1.30		2.60	2.70	0.50										
71	臼井屋敷跡遺跡	1号地下式坑	印旛郡								1.20	1.00	2.50	2.84	2.04		5.79	3.14	0.64										
72	臼井屋敷跡遺跡	2号地下式坑	印旛郡								0.80	0.60	2.10	3.45	1.80		6.21	3.20	1.10										
73	臼井屋敷跡遺跡	3号地下式坑	印旛郡								1.20	0.50	1.40	2.00	1.70		3.40	2.30	0.90										
74	臼井屋敷跡遺跡	4号地下式坑	印旛郡								1.20	0.55	0.25	4.00	2.40		9.60	1.20	0.95										
75	臼井屋敷跡遺跡	5号地下式坑	印旛郡								1.50	2.90	2.40	3.40	2.00		8.84	2.20	-0.20										
76	臼井屋敷跡遺跡	6号地下式坑	印旛郡								2.20	2.60	0.40	4.00	2.00		10.40	2.60	2.20										
77	臼井屋敷跡遺跡	7号地下式坑	印旛郡								1.30	1.90	1.40	2.01	2.05		4.12	2.00	0.60										
78	臼井屋敷跡遺跡	8号地下式坑	印旛郡								1.50	1.10	1.70	2.60	2.00	1.40	5.20	2.40	0.70										
79	臼井屋敷跡遺跡	9号地下式坑	印旛郡											1.80	1.40		2.66	1.70											
80	臼井屋敷跡遺跡	10号地下式坑	印旛郡											1.06	1.82	1.00	1.93	1.40											
81	臼井屋敷跡遺跡	11号地下式坑	印旛郡											2.34	1.60		3.74	0.60											
82	和良比掘込II地区	010号地下式坑	印旛郡								0.95	0.85	1.48	2.90	2.04	1.63	5.92	2.38	0.90										
83	和良比掘込II地区	017号地下式坑	印旛郡								1.26	1.60	0.70	3.33	2.03	1.40	6.76	1.88	1.18										
84	和良比掘込II地区	018号地下式坑	印旛郡								0.64	0.64	1.40	2.36	1.60	1.29	3.78	2.04	0.64										
85	和良比掘込II地区	019号地下式坑	印旛郡								—	—	1.58		1.35		2.56	0.98											
86	和良比掘込II地区	020号地下式坑	印旛郡								1.67	1.00	1.47	2.10	2.00	1.30	4.20	2.39	0.92										
87	和良比掘込II地区	021号地下式坑	印旛郡								1.03	1.03	0.92	2.73	2.32	1.35	6.33	1.51	0.59										
88	和良比掘込II地区	022号地下式坑	印旛郡								1.15	1.15	2.15	1.70	1.30	1.40	2.21	2.90	0.75										
89	上本佐倉上宿遺跡	VI区1号地下式坑	印旛郡								1.10	0.90	0.80	3.00	2.10	1.50	6.30	2.00	1.20										
90	上本佐倉上宿遺跡	VI区2号地下式坑	印旛郡								1.00	1.00	0.70	2.60	2.20	1.30	5.72	0.70	0.00										
91	上本佐倉上宿遺跡	V区1号地下式坑	印旛郡								2.60	2.10	1.00				1.50	0.80											
92	上本佐倉上宿遺跡	V区2号地下式坑	印旛郡								1.20	1.50	1.25																
93	井戸向遺跡	U001号遺構	千葉郡								1.05	1.16	0.82	4.00	2.90		11.60	1.85	1.03										
94	井戸向遺跡	U002号遺構	千葉郡								1.09	1.06	0.60	2.95	1.87		5.52	1.82	1.22										
95	井戸向遺跡	U003号遺構	千葉郡								1.03	1.08	1.10	2.86	2.26		6.57	1.70	0.60										
96	井戸向遺跡	U004号遺構	千葉郡											3.50	3.05		10.68	1.60											
97	井戸向遺跡	U005号遺構	千葉郡								1.50	1.30	0.76	3.40	2.70		9.18	1.94	1.18										
98	井戸向遺跡	U006号遺構	千葉郡								0.82	1.40	0.66	3.05	1.44		4.39	1.15	0.49										
99	井戸向遺跡	U007号遺構	千葉郡								1.33	1.04	0.25	2.94	2.50		7.35	1.82	1.57										
100	井戸向遺跡	U008号遺構	千葉郡											3.08	3.30		10.16	1.38											
101	井戸向遺跡	U009号遺構	千葉郡								1.10	1.05	0.68	2.60	2.60		6.78	1.64	0.96										
102	井戸向遺跡	U010号遺構	千葉郡								1.25	1.06	1.00	3.60	2.96		10.66	1.20	0.20										
103	井戸向遺跡	U011号遺構	千葉郡								1.54	0.42	0.06	2.90	2.90		8.41	1.54	1.48										
104	井戸向遺跡	U012号遺構	千葉郡								0.92	0.93	0.76	2.78	2.00		5.56	1.76	1.06										
105	井戸向遺跡	U013号遺構	千葉郡								2.10	1.06	0.50	2.86	2.10		6.22	1.80	1.30										
106	井戸向遺跡	U014号遺構	千葉郡								1.88	1.03	1.18	3.00	1.68		5.04	2.24	1.06										
107	井戸向遺跡	U015号遺構	千葉郡								0.82	0.90	1.13	1.88	1.75		3.47	1.96	0.83										
108	井戸向遺跡	U016号遺構	千葉郡								1.00	0.60	0.66	3.00	2.18		6.54	1.38	0.72										
109	井戸向遺跡	U017号遺構	千葉郡								2.20	1.47	1.40	2.16	1.40		3.02	2.04	0.64										
110	井戸向遺跡	U018号遺構	千葉郡								1.15	1.00	1.76	2.72	1.80		4.90	1.76	0.00										
111	井戸向遺跡	U019号遺構	千葉郡								0.84	0.64	0.65	1.54	1.10		1.69	1.54	0.89										
112	井戸向遺跡	U020号遺構	千葉郡								1.08	0.70	0.45	3.00	3.00		3.00	1.10	0.65										
113	井戸向遺跡	U021号遺構	千葉郡								0.85	0.85	1.30	0.70	0.65		0.46	1.50	0.20										
114	井戸向遺跡	U022号遺構	千葉郡								0.90	0.86	0.86	2.50	1.52		3.80	1.75	0.89										
115	井戸向遺跡	U023号遺構	千葉郡								0.80	1.00	1.25	2.42	2.00		4.84	2.05	0.80										
116	井戸向遺跡	U024号遺構	千葉郡								1.70	1.40	1.10	1.88	1.38		2.32	2.10	1.00										
117	西屋敷遺跡	204号跡	千葉郡								1.10	1.80	0.75	2.30	1.40	1.50	3.22	2.10	1.35										
118	西屋敷遺跡	205号跡	千葉郡								1.40	1.40	1.15	2.50	1.60	1.40	4.00	2.15	1.00										
119	西屋敷遺跡	300号跡	千葉郡								1.80	1.80	1.20	2.55	1.70		4.34	2.60	0.80										
120	西屋敷遺跡	367号跡	千葉郡								1.80	2.00	1.30	3.30	2.25		7.43	1.70	0.40										
121	西屋敷遺跡	401号跡	千葉郡								1.60	1.60	1.00	2.90	2.30		6.67	2.50	1.50										
122	西屋敷遺跡	403号跡	千葉郡								1.30	0.30	0.50	1.50	1.20		1.60	1.20	0.70										
123	西屋敷遺跡	406号跡	千葉郡								1.30	1.60	1.80	2.75	1.85		5.09	2.50	0.70										
124	西屋敷遺跡	423号跡	千葉郡								1.50	1.50	1.20	3.25	2.85		8.61	1.95	0.75										

第2章 検出遺構について

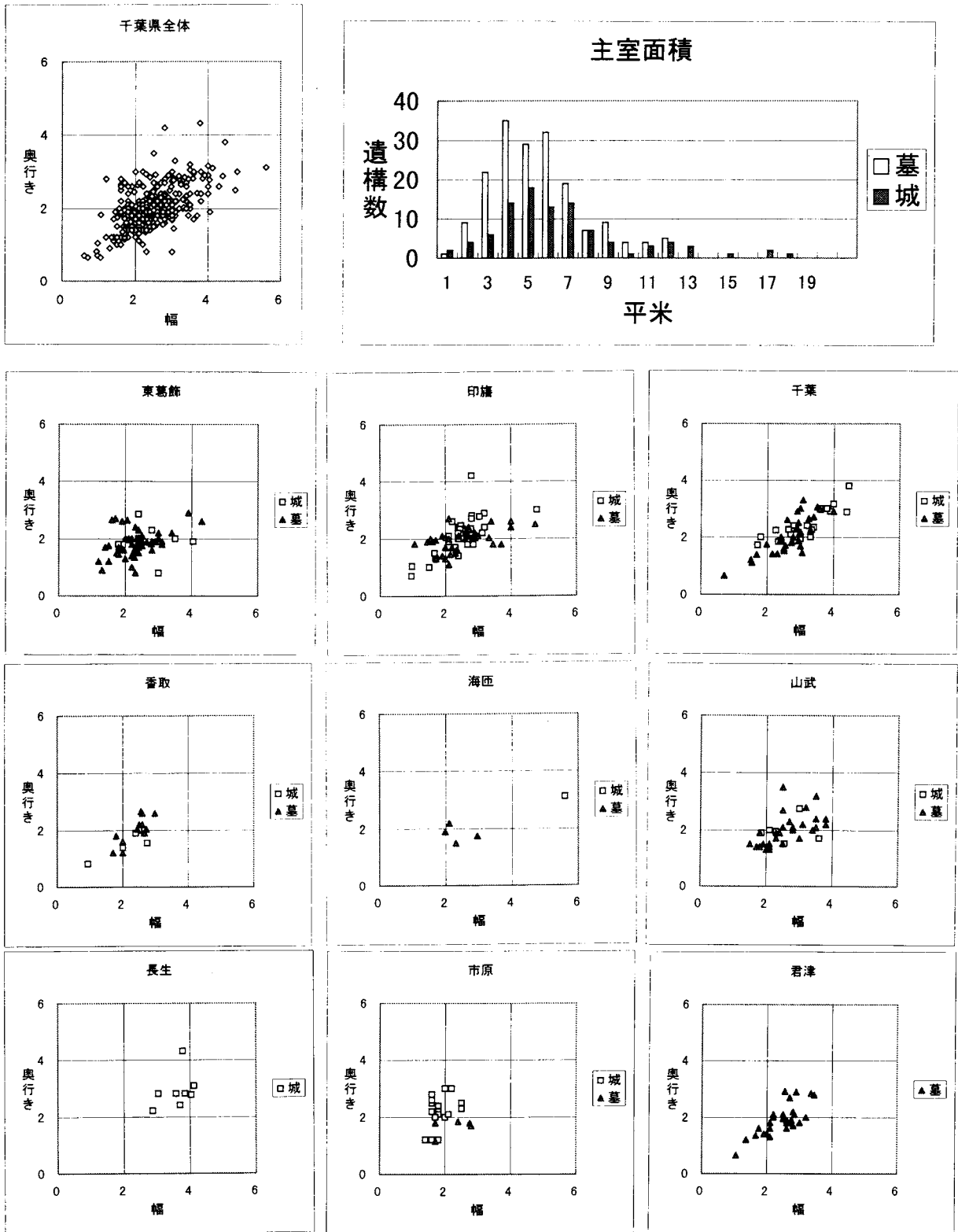
墓地検出				立地		占拠		規模								天井部		竪坑の方向		遺蔵物								
墓地番号	遺跡名	遺構番号	旧郡	台地縁辺	台地奥	低地	その他	整形区	無関係	竪坑：幅	：奥行	：深さ	主室：幅	：奥行	：高さ	：面積	：深さ	：段差	有	無	不明	整形内側	谷側	無関係	有	有りの場合何か	無	不明
125	西屋敷遺跡	67号跡	千葉郡	1						2.00	1.40	1.50	2.40	1.90		4.56	1.90	0.40	1								1	
126	下男山遺跡	SK-1	香取郡	1					1	0.80	1.02	0.60	2.66	1.92		5.11	1.66	1.06	1									1
127	下男山遺跡	SK-2	香取郡	1					1	1.62	1.54	1.40	2.56	2.66		6.81	2.08	0.68	1									1
128	下男山遺跡	SK-3	香取郡	1					1	0.72	0.88	0.80	2.72	2.04		5.55	1.38	0.58	1									1
129	下男山遺跡	SK-6	香取郡	1					1	0.74	1.04	0.80	2.44	2.04		4.98	1.40	0.60	1									1
130	下男山遺跡	SK-7	香取郡	1					1	0.88	1.30	1.20	2.00	1.60		3.20	2.00	0.80	1									1
131	下男山遺跡	SK-8	香取郡	1					1	1.20	1.10	1.10	2.50	2.20		5.50	1.88	0.78	1									1
132	下男山遺跡	SK-9	香取郡	1					1	0.88	1.60	1.60	2.98	2.60		7.75	2.04	0.44	1									1
133	下男山遺跡	SK-12	香取郡	1					1	1.00	1.50	1.00	2.66	1.90		5.05	1.66	0.66	1									1
134	吉原三王遺跡	503号土塼	香取郡	1					1	1.10	1.10	2.20	1.70	1.20		2.04	2.40	0.20	1									1
135	吉原三王遺跡	515号土塼	香取郡	1					1	0.60	0.60	1.80	2.00	1.20		2.40	2.40	0.60	1									1
136	吉原三王遺跡	523号土塼	香取郡	1					1	0.90	0.40	2.40	2.60	2.60		6.76	1.60	-0.80	1									1
137	吉原三王遺跡	583号土塼	香取郡	1					1	0.90	0.80	1.20	1.80	1.80		3.24	2.10	0.90	1									1
138	吉原三王遺跡	635号土塼	香取郡	1					1	1.00	0.90	1.20	2.60	2.20		5.72	2.20	1.00	1									1
139	八石田遺跡	1 A号地下式土塼	海防郡	1					1	1.10	1.00	0.90	2.95	1.75		5.16	1.52	0.62	1									1
140	八石田遺跡	1 B号地下式土塼	海防郡	1					1	1.00	0.90	1.20	1.98	1.98		3.76	1.84	0.64	1									1
141	八石田遺跡	2号地下式土塼	海防郡	1					1	1.10	1.00	0.70	2.10	2.20		4.62	2.90	2.20	1									1
142	八石田遺跡	3号地下式土塼	海防郡	1					1	1.30	1.20	1.30	2.30	1.50		3.45	1.60	0.30	1									1
143	吉宿・上谷遺跡	P-061	山武郡	1					1	1.20	1.30	1.00	2.50	3.50		8.75	1.50	0.50	1									1
144	吉宿・上谷遺跡	P-062	山武郡	1					1	1.10	1.10	1.00	2.30	1.90	1.40	4.37	1.30	0.30	1									1
145	吉宿・上谷遺跡	P-063	山武郡	1					1	1.10	1.10	0.40	1.50	1.50		2.25	0.90	0.50	1									1
146	吉宿・上谷遺跡	P-067	山武郡	1					1	1.20	1.30	1.10	2.80	2.10		5.88	1.80	0.70	1									1
147	吉宿・上谷遺跡	P-070	山武郡	1					1	1.50	1.30	1.20	2.70	2.30		6.21	1.70	0.50	1									1
148	吉宿・上谷遺跡	P-072	山武郡	1					1	1.20	1.20	0.30	3.10	2.20		6.62	2.00	1.70	1									1
149	吉宿・上谷遺跡	P-091	山武郡	1					1	1.70	1.60	1.20	2.50	2.10		5.25	2.10	0.90	1									1
150	吉宿・上谷遺跡	P-097	山武郡	1					1	1.40	1.80	0.20	1.90	1.90		3.42	1.80	1.60	1									1
151	吉宿・上谷遺跡	P-115	山武郡	1					1	1.20	1.10	1.80	2.10	1.30		3.15	1.50	0.50	1									1
152	吉宿・上谷遺跡	P-163	山武郡	1					1	1.50	1.20	0.50	2.40	1.90		4.56	1.60	1.10	1									1
153	吉宿・上谷遺跡	P-164	山武郡	1					1	1.10	1.00	0.70	3.80	2.20		6.36	1.70	1.00	1									1
154	吉宿・上谷遺跡	P-175	山武郡	1					1	3.00	2.00	1.40	3.00	1.70		5.10	2.30	0.90	1									1
155	吉宿・上谷遺跡	P-182・183	山武郡	1					1	1.60	1.40	1.00	2.10	1.40		2.94	1.50	0.50	1									1
156	吉宿・上谷遺跡	P-177	山武郡	1					1	1.20	1.10	1.00	3.40	2.00		6.80	1.70	0.70	1									1
157	吉宿・上谷遺跡	P-178	山武郡	1					1	1.30	1.80	1.20	3.80	2.40		9.12	2.10	0.90	1									1
158	吉宿・上谷遺跡	P-191	山武郡	1					1	1.50	1.80	1.00	3.50	2.40		8.40	2.00	1.00	1									1
159	吉宿・上谷遺跡	P-288・287	山武郡	1					1	1.40	1.50	0.70	3.50	2.10		7.35	1.00	0.30	1									1
160	山中台遺跡	1号地下式土塼	山武郡	1					1	0.80	0.40	0.50	3.50	3.20		11.20	2.90	2.40	1									1
161	山中台遺跡	2号地下式土塼	山武郡	1					1	0.80	0.20		3.20	2.50		8.96	1.70		1									1
162	山中台遺跡	3号地下式土塼	山武郡	1					1	1.10	0.60	1.30	2.50	2.70	2.00	6.75	2.70	1.40	1									1
163	山中台遺跡	4号地下式土塼	山武郡	1					1										1									1
164	山中台遺跡	5号地下式土塼	山武郡	1					1										1									1
165	山中台遺跡	6号地下式土塼	山武郡	1					1										1									1
166	山中台遺跡	7号地下式土塼	山武郡	1					1	0.40	0.60	0.60	2.30	1.70		3.91	1.60	1.00	1									1
167	久我台遺跡	SX 1	山武郡	1					1	1.10	0.85	1.40	1.90	1.50		2.85	2.45	1.05	1									1
168	久我台遺跡	SX 2	山武郡	1					1	0.90	0.70	1.50	1.80	1.40	1.60	2.52	2.50	1.00	1									1
169	久我台遺跡	SX 3	山武郡	1					1	0.80	1.05	0.80	1.70	1.40		2.38	1.60	0.80	1									1
170	久我台遺跡	SX 4	山武郡	1					1	0.60	0.90	1.60	2.00	1.30	1.50	2.60	2.60	1.00	1									1
171	久我台遺跡	SX 5	山武郡	1					1	0.90	0.80	1.20	2.10	1.30	1.60	2.73	2.20	1.00	1									1
172	久我台遺跡	SX 6	山武郡	1					1	1.20	0.20	0.85	2.50	1.50		3.75	1.30	0.45	1									1
173	久我台遺跡	SX 7	山武郡	1					1	0.35	0.20	2.55	2.80	2.00	1.90	5.60	2.55	0.00	1									1
174	草刈六之台遺跡	246号地下式土塼	市原郡	1					1	0.77	0.85	1.45	2.40	1.85	1.50	4.44	2.75	1.30	1									1
175	草刈六之台遺跡	345号地下式土塼	市原郡	1					1	0.60	0.70	0.95	1.70	1.15	1.10	1.98	2.05	1.10	1									1
176	草刈六之台遺跡	351号地下式土塼	市原郡	1					1	0.70	0.87	1.25	1.70	1.80		3.06	2.08	0.83	1									1
177	草刈六之台遺跡	761号地下式土塼	市原郡	1					1	0.80	0.60	1.63	2.76	1.80	1.54	4.97	3.17	1.54	1									1
178	草刈六之台遺跡	777号地下式土塼	市原郡	1					1	0.80	1.00		2.80	1.70	1.20	4.76	1.20		1									1
179	神田遺跡	73号跡	君津郡	1					1	1.50	1.60	3.00	3.45	2.80	2.00	9.66	3.20	0.20	1									1
180	神田遺跡	74号跡	君津郡	1					1	1.60	1.70	2.65	2.90	2.90	2.00	8.41	3.25	0.60	1									1
181	神田遺跡	75号跡	君津郡	1					1	1.87	3.30	2.75	3.55	3.92	1.68	7.45	3.10	0.35	1									1
182	神田遺跡	79号跡	君津郡	1					1	1.74	1.90	1.70	2.70	2.70	1.70	7.29	3.00	1.30	1									1
183	荒久(2)遺跡	SK-68	君津郡	1					1	2	0.2	0.2	2.2	2.1		4.62	2	1.8	1									1
184	荒久(2)遺跡	SK-70 a	君津郡	1					1	0.8	0.6		1	3.35	2.85	6.5475	2.8	1.8	1									1
185	荒久(2)遺跡	SK-31	君津郡	1					1	1	0.8	1.75	1.6	0.8	2.6	1.2	0.4	1										1

第2章 検出遺構について

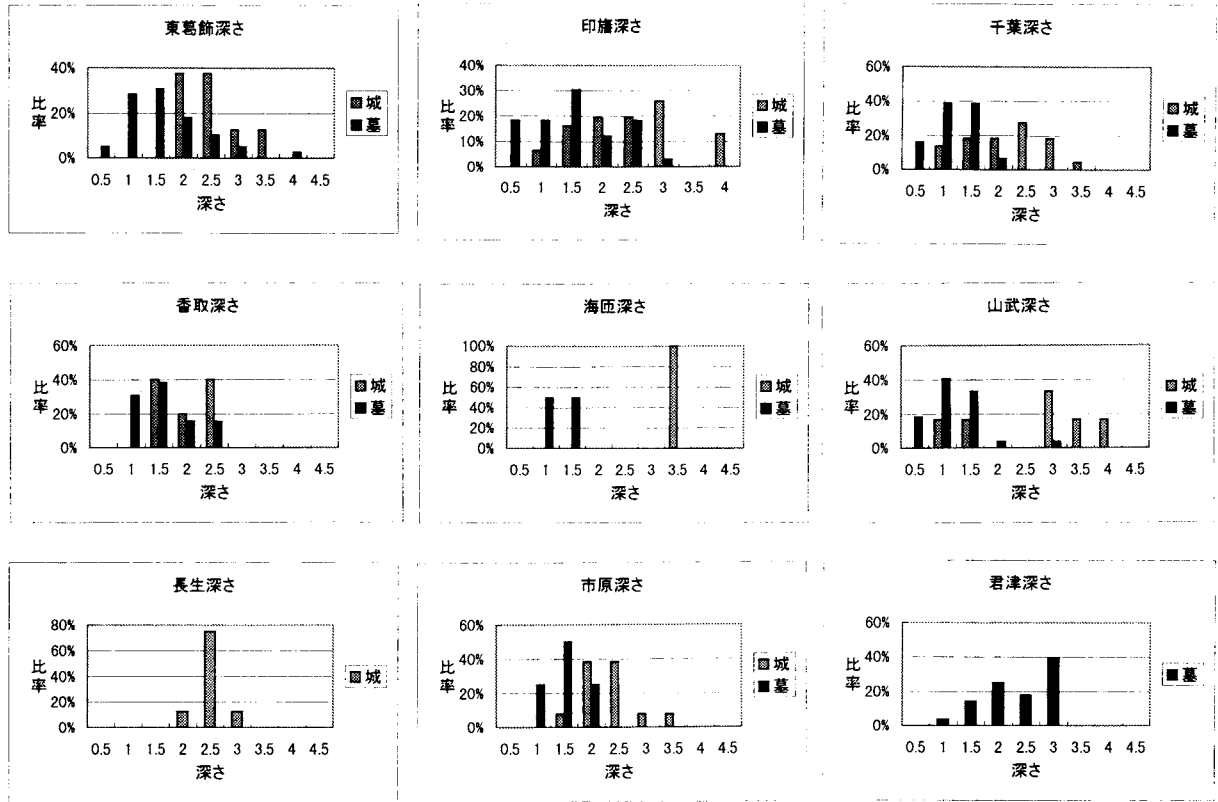
墓地検出			立地				占地				規模							天井部			竪坑の方向			遮蔽物							
墓地番号	遺跡名	遺構番号	旧郡	台地縁辺	台地奥	低地	その他	整形区縁	整形区内	無関係	竪坑幅	奥行	深さ	主室幅	奥行	高さ	面積	深さ	段差	有	無	不明	整形内側	谷側	無関係	有	有りの場合何か	無	不明		
																														62	118
186	荒久(2)遺跡	SK-13	君津郡							1	0.9	1.2	1.3	2.75	1.8		4.95	1.3	0									1			
187	荒久(2)遺跡	SK-12	君津郡	1						1	1.95	1.95	2.4	2.2	2	1.5	4.4	2.4	0	1				1					1		
188	荒久(2)遺跡	SK-71	君津郡	1						1	1.2		1.5	1.35	1.2		1.82	1.5	0	1				1					1		
189	荒久(2)遺跡	SK-87	君津郡	1						1	1.15	1.25	0.3	1.05	0.65	0.65	0.6825	0.6	0.5	1					1					1	
190	荒久(2)遺跡	SK-41	君津郡	1						1	1	1	1.2	2.1	1.8	2	3.78	2.45	1.25						1					1	
191	荒久(2)遺跡	SK-43	君津郡	1						1	1.3	1.3	1.2	2.6	1.9		4.94	2.75	1.55					1						1	
192	荒久(2)遺跡	SK-61	君津郡	1						1	1.1	1.1	1.7	2.75	1.8		5.225	1.7	0	1				1						1	
193	荒久(2)遺跡	SK-58	君津郡	1						1	0.55		2.55	2.8	2.2		6.16	2.55	0					1						1	
194	荒久(2)遺跡	SK-56	君津郡	1						1	1		1.4	2.6	1.8		4.68	2.1	0.7					1						1	
195	荒久(2)遺跡	SK-113	君津郡	1						1	0.7		0.3	2	1.4		2.8	1.25	0.95					1						1	
196	荒久(2)遺跡	SK-117	君津郡	1						1	1.4		1.6	2.6	1.95		4.875	1.9	0.3	1				1						1	
197	荒久(2)遺跡	SK-122	君津郡	1						1	1.4	1.4	2.6	2.6	1.6	1.7	4.16	2.6	0	1				1						1	
198	荒久(2)遺跡	SK-88	君津郡	1						1	1.2	1	2	2.1	1.3	1.8	2.73	2.63	0.63	1				1						1	
199	荒久(2)遺跡	SK-89	君津郡	1						1	1.4	1.4	1.5	3	1.8	1.5	5.4	2	0.5	1				1						1	
200	荒久(2)遺跡	SK-90	君津郡	1						1	1	0.9	1.7	2.1	1.6	1.9	3.36	2.8	1.1	1				1						1	
201	荒久(2)遺跡	SK-135	君津郡	1						1	1.7	2.9	1.8	2.5	2.1	1.55	5.25	2.55	0.75	1				1						1	
202	荒久(2)遺跡	SK-143	君津郡	1						1	1.4	1.1	1.4	3.2	2	1.65	6.4	2.45	1.05	1				1						1	
203	荒久(2)遺跡	SK-240	君津郡	1						1	1.2		1.65	2.6	1.7		4.76	2.25	0.6	1				1						1	
204	荒久(2)遺跡	SK-158	君津郡	1						1	1.2		0.6	1.65	1.35		2.2275	1.8	1.2	1				1						1	
205	荒久(2)遺跡	SK-231	君津郡	1						1	0.9	0.9	2.8	2.85	2.1	1.7	5.965	2.8	0	1				1						1	
206	荒久(2)遺跡	SK-175	君津郡	1						1	0.9		0.7	1.9	1.4		2.66	1.9	1.2	1				1						1	
			62 118 0 0 27 34 120															158 9 13 38 60 80 0			63 114										
			34% 65% 0% 0% 15% 19% 66%															87% 5% 7% 21% 33% 44% 0%			35% 63%										

第9表 地下式坑出土遺物

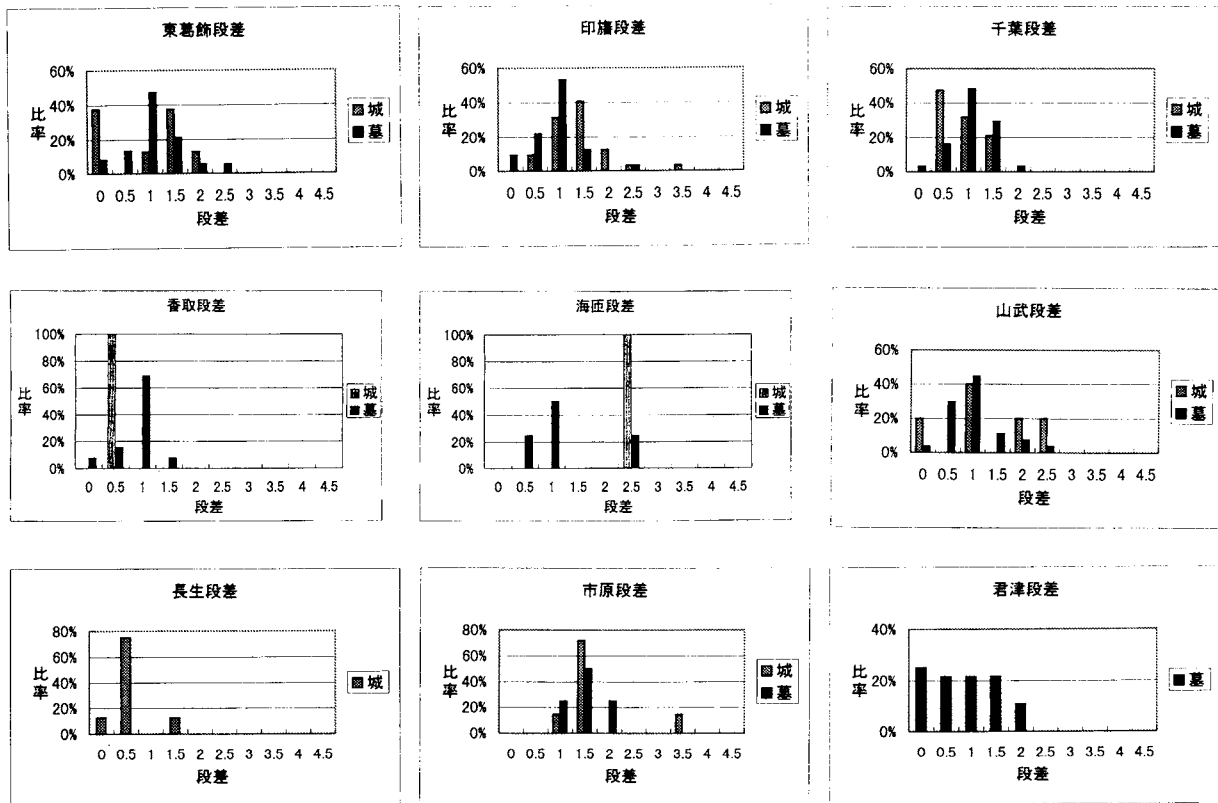
性質	種類	墓							城							計																
		市原	山武	香取	千葉	印旛	東葛	君津	市原	長生	山武	香取	千葉	印旛	東葛																	
石	石			1			1																									1
石	五輪塔																															0
石	石遺物		1																													0
金属	鏡						1																									0
金属	刀子																															0
金属	古銭						1		1		2		1																			2
器	カラケ						2				2																					4
器	搔鉢								1		1																					1
器	火鉢			1							1																					0
青磁	碗			1					1		2																					0
瀝美	甕			1							1																					0
古瀬戸	平鉢						1				1																					0
瀬戸	平碗			1							1																					0
瀬戸	皿										0																					0
瀬戸美濃	小皿										1		1																			1
瀬戸美濃	盤										1																					0
瀬戸美濃	天目茶碗			1							1			1																		2
常滑	甕		1	1					1	1																						1
常滑	平鉢								1		1																					0
陶磁器											0			1																		2
有機質	貝								1		1																					2
有機質	骨										2		2																			0
有機質	敷物										1		1																			0
有機質	獣骨										1		1																			0
有機質	炭化材										1		1		1	9											1					11
有機質	灰										0																					1
計		1	7	1	8	3	8	28	3	13	2	4	1	6	5	1	35															



第175図 地下式坑主室面積 (単位はm)



第176図 地下式坑深さ



第177図 地下式坑段差

遺構形態については、半田式のYがほとんどで、Mは僅か3例である。Yの中でも階段等を有さない1が4/5を占め、その中でも竪坑と主室が近接するc・d類が多い。竪坑の平面形については、若干方形が多い傾向に有る。

池上分類ではTが2/3以上を占め、次いでS、長の順になる。この他にr、凸が若干見られる。各平面形ともYが多く、あまり羨道部は見られない。

形態分類については、段や羨道の有無については、共通した分類であり、有段無羨道のものが多いことを示している。半田分類からは、有段と言っても階段状の施設等を持たないものが多いということが判明している。また池上分類からは、T・S・長の割合がほぼ6：3：0.5の割合で、残り0.5がr・凸を呈している。

6. 地下式坑の規模

今回地下式坑の客観的対比を目指して、竪坑、主室の規模を計測値によって表した。

主室の大きさをグラフにまとめると(第175図)、幅と奥行き比が同じ1：1から、幅が奥行きより長くなる3：2までになるような比率のものが大半を占める。このことを、郡別に見てみると、香取郡や千葉郡においては同様の傾向が明確に窺える。しかし、東葛郡や印旛郡・市原郡においては、幅と奥行き比が2：3となるような、平面が長方形を呈するものが目に付く。

主室の幅と奥行きを乗算した面積についてみると(第175図)、城館跡・墓地ともに4㎡～7㎡のものが多く、しかし、墓地から確認された地下式坑は、12㎡を超えるものが見られないのに対して、少数例ながら城館跡においては13㎡～18㎡に至る大きめのものが認められる。

確認面から計測した深さを、各郡別に城館跡検出数、墓地検出数の比率で示したもの⁹⁾を見てみると(第176図)、城館跡・墓地いずれもかなりのばらつきがあるが、1m～2mの範囲の数量において、城館跡から確認されたものよりも、墓地から検出されたものの方がかなり多い傾向に有る。東葛郡、印旛郡、千葉においては城館跡から検出されたものが2m～3mの範囲において墓地から検出されたものを上回っている⁹⁾。先の主室面積と合わせて考えると、城館跡から検出されたものは、墓域から検出されたものよりひとまわり大きい傾向を示している。

同じような状況が、竪坑の深さにおいても見て取れる。竪坑の場合は、墓地から確認された地下式坑は約1mのものが最も多く、城館跡から確認されたものの倍以上を数える。

また、竪坑と主室の段差(主室の深さ－竪坑の深さ)においても、墓地から確認された地下式坑は、1m～2mの範囲に集中する傾向を見て取れる(第177図)。

1遺跡における地下式坑の数量については、城館跡も墓地も1基から20数基と幅広い(第10表)。しかし墓地においては、単独で確認されることは少なく、4基～7基、10数基を数えるものが多い。台地整形区画の認められる遺跡においては4基～11基、特に7基～8基確認されるものが多い。このことは、墓地における地下式坑が、群をなして構築される傾向にあることを示している。これに対して城館跡では1遺跡において1基～2基しか確認されない例が多いことを示している。但し1基～2基しか確認されない城館跡についても、調査範囲が城館跡の一部分にすぎず、未調査部分において存在している可能性は否定できない。

7. 城館跡と墓地の比較

城館跡で検出された地下式坑と、墓地で検出された地下式坑を比べると、立地においては、どちらも台地上にあり、その台地上でも縁辺、奥ほぼ同数であった。台地整形区画については、どちらも確認出来なかった例が多い。ただし城館跡において検出されたものが、城館としてその空間が使用される以前に構築されたものであり、城館構築の際削平されたと考えることも出来る。しかし城館跡から検出された地下式坑の深さは、墓地から検出された地下式坑と比べて浅いと言うことは少なく、どちらかといえば深いという傾向が窺える。城館と地下式坑の間に前後関係があったにしても、台地整形区画が存在していた可能性は少ないと言えよう。

天井についてはどちらも掘り残しの天井で占められているが、墓地においては若干例ではあるが掘り残しではない可能性を指摘できるものが存在している。南関東においても、天井が確認出来ない地下式坑において、崩落等によって天井部を失ったもの以外の理由も考えてみるべきであろう。竪坑の方向については、墓地において主室側より低い場所を選んでいる例が若干多い傾向にある。しかしそれは、台地整形区画に関わるものが4割近くを占めており、それ以外の谷側を向いているものは、山側を向いているものよりは少ない。竪坑の方向については、それが主室よりも高いとか低いと言う理由で決められるのではなく、他の要因が存在していると考えべきであろう。その例として台地整形区画の存在を、竪坑の掘削面を主室の地表より下げるためのものではなく、平面的な区域の設定にあるとすれば、他の例においても何らかの形で区域が設定されており、それに従って竪坑の方向が決定されたと考えられる。

遮蔽物については、ほとんど認められなかった。地下式坑の構築時にその存在を想定していたかどうかはなお検討の余地はあるが、最終的な段階では存在しなかったと言えよう。

付帯施設については、ピット、壁溝が多いと言う共通点が指摘できる。但し墓地から検出されたものには少数例ながら、龕や棺座のように、葬制と関るものが認められるのに対して、城館跡からのものには、明確に葬制に関ると判断できるものは認められなかった。

出土遺物については、城館跡において検出されたものの方が比率的には若干多い傾向にある（第9表）。但しそれは炭化材の検出例が際立ったことによるもので、それを除けば墓地から検出されたものの方が質量共に勝っている。しかし何れの場合においてもその遺物内容から、地下式坑が葬送施設とする根拠にはならないが、貯蔵用の施設とするにもあまりに貧弱な内容である。

周辺に見られる遺構として、城館跡においては掘立柱建物が卓越しているが、これは地下式坑と同時存在していたと言う確証は無く、掘立柱の柱穴と重複した例も認められることから、地下式坑の機能が失われた後で構築された可能性が高い。それよりも少数例ながら確認されている火葬施設のように葬制を示す遺構の存在を注意すべきであろう。

地下式坑の形態については、城館跡・墓地何れから検出されたものについても、竪坑と主室の間に段を有し、羨道、階段などを伴わずに主室に至り、主室は竪坑側から見て横長に普請されているものが多い傾向にある。但し主室の形態については、墓地から検出されたもののほうが、バラエティーに富んでいるということが出来る。

地下式坑の年代については、城館跡・墓地何れにおいても明確な時期を挙げることは出来ない。今回地下式坑を検出した遺跡の存続時期は、「第3章出土遺物」から時期を類推すると、その最古は吉原三王遺跡の11世紀後半、最新のもので三輪野山遺跡の19世紀前半であるが、これは遺跡としての年代であり、地下

式坑そのものと直接関係するとは限らない。しかしその他の神田第III遺跡や高品城、東中山遺跡や井戸向遺跡などを合わせて見ると、15世紀段階にこれらの遺跡の存続時期がまとまる傾向がある。地下式坑についてもこの周辺に関係する可能性を考えるべきであろう。

8. まとめ

城館跡・墓地それぞれの遺跡から検出された地下式坑について、様々な角度から検討を加えたところ、両者には類似する点が多々認められることから、大半の城館跡における地下式坑には、その機能もまた葬送施設という同じ働きのために構築されたと考えるべきかもしれない。高品城跡や小林城跡・和良比掘込城跡などがその例である。

城館跡において群集する地下式坑の存在について、その多くは、その場所が、城館として機能する以前に構築されたものと言えよう。その場所は、地下式坑を構築した地理的・社会的・精神的連携を持った人々の葬送に関するものであった。しかしその人々にとって、地下式坑を構築する墓地が、城館を構築する場所に変化していったと捉えられる。その際大規模な土木工事が行われたことになるが、その工事において、地表面の削平はあまり行われていないと考えられる。これは先に述べたとおり、城館跡から確認された地下式坑も、墓地から確認された地下式坑と深さにおいて遜色がない状況を呈しているからである。地下式坑を作るための空間としても、ある程度の土木工事が行われ、その結果として存在した造成地に城館としての施設を継ぎ足すような形で変異していったと考えられる。

また、城館跡から検出された地下式坑については、その葬送の対象者において、墓地から検出されたものとは、階層などが若干異なるのではないだろうか。城館跡から検出された地下式坑は、墓地が城館へと変化したときに土木工事が行われたとしても、深さを減じたと感じさせないほど深く掘り窪めていたのに対して、墓地であり続けたような遺跡から検出された地下式坑は、その後の土木工事が行われていないにも関わらず、深さが浅い状況を呈している。

高品城跡においては、城館跡内から25基の地下式坑が検出されている（第48図・図版7-1）が、この25基は調査範囲の南北2か所にまとまって分布している。北側のまとまりをI群、南側のまとまりをII群とし、地下式坑の数は、それぞれ11基と14基で南側のII群がやや多い傾向にある。両群の間には、深さにおいて、南側の方が北側のものより深い傾向を示している。築瀬裕一氏は、I群から検出された地下式坑の形態がII群の地下式坑のものより簡略化されていることから両者の違いを、南側のII群が古く、その後浅いI群のものが構築されたとして、時期差に求めている。古いものほど深くしっかりしたものが構築され、新しくなるにつれて浅くシンプルなものへと変化していくと言う考えは、他の地下式坑についてもこの傾向を当て嵌めることができるのではないだろうか。高品城と同様に、近接して検出された和良比掘込城跡の地下式坑13基と和良比掘込II地区の6基・和良比台畑地区の1基計7基において、その面積が、前者の平均は6.2㎡なのに対して後者が4.9㎡、深さが、前者は3.0mなのに対して後者が1.7mと差が認められる。このことは高品城跡の結果と符合している。

地下式坑が、時代を経るに従って、浅くシンプルになる傾向をもっていると考えると和良比掘込城跡の結果を見ると、当初墓地であった場所が、城館へと変化し、少し離れた場所に墓地を構築したとも考えられるが、高品城跡のように前後差を有する墓地群が何れも城館へと変化している様子もあることから、城館の構築場所は、早くから地下式坑を構築出来た集団に関する場所と考えるべきではないだろうか。これは、

古くから地下式坑を使用していた集団の占有地が、城館へと変化したことになる。

笹生氏は、千葉県における城館跡内からの地下式坑の検出については、上層農民層より一段高い土豪層の墓域が、城域へと変化していく状況を想定されている^{②-302}。この論考において、現在われわれに地下式坑として認識される遺構が検出する遺跡の性格は、その地下式坑を構築した集団の階層における、その後の領域に対する意識の変革の有無によって決定付けられたものとされている。

また墓域を城域に変化させた一因について、井上哲朗氏は、「村の城」として、村落間紛争等から始まる防御施設の必要から発生したものと想定された^{②-286}。特にその後の社会的変動の中で武士層に取りこまれ度重なる変革を加えられたものが、大規模な城館として成立した可能性を示唆されている。これは、地下式坑を検出する中世城館跡は、その生い立ちが「村の城」であり、その前身が土豪層による墓域と考えることも出来る。その背景には中世後半に経済的飛躍を成し得た地縁的・血縁的集団の存在が想定されよう。

かつて宇田川洋氏が、北海道のチャシについて「祭りの場」から「談合の場」、更に「戦闘の要塞」へと発展して言ったものと想定されている^{④-131}。これは柴田龍司氏が述べているような、「聖」から「俗」への転化、集団の精神的場所であった領域が、戦闘的場所へと変化していったことと共通している^{②-300}。中世の千葉における城館の構築に際しても同様に、在る空間に対する集団内の意識に変化があったものと考えべきであろう。

ただし、城館跡から検出された地下式坑と、墓地から検出された地下式坑との間にはなお若干ではあるが傾向の異なる点も存在している。恒常的、突発的に関らず、戦闘に関する施設である城館において、備蓄、隠匿と言った行為の存在は当然考えるべき問題であり、そのための施設としての地下式坑の存在も看過できない¹⁰⁾。或いは、それ以外にも何らかの要因が働いていた可能性を考えるべきかもしれない。今後城館跡の調査・整理等による更なる資料の蓄積が、これらの問題についてより高度な検討を可能とするであろう。

今回地下式坑を集成するに際して、その覆土の状況や遺物の出土状態が明記されていないものを散見した、これらは遺構の使用状態や廃棄状態を考察する上で欠くべからざる資料となるので、今後は地下式坑という形態のみの把握ではなく、できる限りの情報収集が望まれる¹¹⁾。

注

- 1) 既に本報告がなされている四街道市和良比掘込城跡^{③-195}（図版6-1）や千葉市高品城跡^{③-280}（図版7-1）をはじめ、光町篠本城跡^{④-130}（図版9-1）や、木更津市笹子城跡^{②-258}（図版11-1）のような、破壊を前提にした調査はその隅々まで曝け出してくれる。
- 2) 中田 英 1976『草山遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告11 のまとめの部分において若干の考察を加えている。
- 3) 昭和50年以前の研究史については、中田氏が論を始めるにあたって詳しく述べておられるので、こちらを参照願いたい。
- 4) 地下室・玄室・主体部等とも呼ばれるが以降は「主室」として統一する。
- 5) 竪坑と主室を平面形どおりに地表面から掘り下げるのではなく、先ず竪坑を掘り下げ、その底部付近から横に掘り進み、地山を天井として掘り残したもの。
- 6) 火葬墓と火葬土坑を合わせて火葬施設とした。
- 7) 人骨や副葬品の伴うものや調査担当者が墓と認めたものを墓墳とし、それ以外を土坑とした。ただし